
異世界で過ごす日々

h o z

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で過ぐす日々

【Zコード】

N9118W

【作者名】

honz

【あらすじ】

突如として異世界に来てしまった、主人公こと橋本隆也は、異世界での生活を通して学び、成長していく。

初めて書く小説ですので、ひどい雑文だと思いますが読んでいただけたら、幸いです。

何かお気づきの点がありましたら、どうか感想のほうまでおねがいします。（酷評大歓迎です）

序話

4月、とある公立高校で卒業式が行われていた。

校長が話をする中、退屈なつまらない卒業生の中に俺はいた。

校長の話など聞くわけもなく、あくびをして田尻にたまつた涙を指で拭う。

俺は、別に優秀なわけでもなく目立つほど不良な生徒でもない、友達もそれなりにいたし、楽しい普通な生活は送っていた。

普通な生活に満足していた俺にとって、この後おこることがいいことだったのか、悪いことだったのかはわからないが、人生の転機であり、普通の生活の崩壊と呼ぶにふさわしい出来事だったことはたしかだらう。

まあこの時の俺は、何が起きるかなんて考えもせず、あまりの退屈さに睡魔に打ち倒されてしまい、俺の意識は途切れた。

そして

意識が戻った時にいた場所は俺の知らない場所だった。

序話（後書き）

どうも作者のこころです

今日は自分の小説を読んでいただきありがとうございます

更新は可能な限り頑張る所存ですので、どうかよろしくお願いします

第1話 TKGって今頃言わないよね

周りでは爆破音が轟き、人が倒れている、戦場であると判断するには十一分な条件がそろっているが、頭がそれを拒否する。

平和な日々を日本で暮らしてきた俺のことってそれは信じられるものではなかつた、そして、なによりも一番不可解なのは……

目の前でいつまでも校長こと富井康安寺源十郎、駭してTKGが話し続けていることだ。

このおっさんは周りが見えていないのだろうか？

こんなおっさんに気を使つている暇はない、許せTKG俺は逃げる。恨むならこんな状況下に俺らを置いた誰かを恨め。

俺はほとんど感じていらない罪悪感を胸に、姿勢を低くし走り出した。その直後、背後でおこつた爆発に俺の体は吹き飛ばされ、数メートル地面を転がつた、軽くひざが痛むが走るのにはそれほど問題はないやうだ。

その時ふと気になり、TKGの居たあたりを見ると、地面には爆破による窪みがあるだけで、TKGの姿はどこにもなかつた。

「TKG……」

TKG俺は泣かないよだつて・・・あんたのことよく知らないもん。叫んだのは・・・あれだ、うん、ノリ、混乱状態に陥つて何を考えているのかすら軽くわからない状態なんだからノリで何か言つてもおかしくない。

とにかく、TKGの一の舞にはなるまいとして、俺が走り出そうとしたとき、突然声が聞こえてきた。

「おー、おまえ。なぜここにいる

声のしてきたほうを見るといまじきは映画の撮影でもなければつけないような鉄兜に革製である胸当て、明らかに時代錯誤な中世でもイメージしたかのような服を着た男がいた。

周りを見ても他に誰もないので、『俺のことか?』と聞くかのように、自分のことを指さすジェスチャーで尋ねた。

「そうだ、お前だ、ああ~めんどくさい、ちょっと来い

めんどくさいに、そういうと男は俺の腕を引っ張り、丸められて筒状になつた紙を懐から取り出し、紙を広げ地面に置くと紙は光だし、俺はあまりの眩しさに目をつぶってしまった。

「あれ、なんで?俺今まで……」

俺はさつさまで何もない野外の荒野にいたはずなのに、今は屋内にいることに困惑する。

「ほりうちだ、ついてこい

今どこにいて、何が起きているのかも理解できない今の俺はただただ従う」としかできなかつた

「演習場内に紛れ込んだ、民間人と思しき少年をつれできました。」

なるほど、さつきのことは演習場だったのか、演習場ねえ、演習

場……

「演習場！？」

明らかに人が倒れているといった場所を演習場だと言われ俺は驚く。

「何をそんなに驚いてるんだ？」

「いやだつて演習なのにおもいつきり人倒れてたじやん！！」

「ああ～、あれは人形だ」

人形……？

なんだか動いてたのがいたような気がしたのは氣のせいだったのか

……？

「おい、そこの兵士、余計なことは言わないでいいから下がつてい
る」

目の前でこの兵士の上官に当たるであろう人物が言葉を発した。

「ああ、すんません、んじゃ失礼します」

俺を連れてきた男は、やる気がまるでないかのように適当に返事をして、俺を置いてどこかに行つてしまつた、そして、残された俺の前には、偉そうなガキが護衛を連れて佇んでいた。

顔はさつきの男よりも大きな兜をかぶり口元も布で隠しているため見えない、鎧は無駄に豪華で機能性があるのかどうかも怪しい。

「おこ、お前なぜあのよつな場所にいた?」

それを知りたいのはこっちであるが、あえてこの質問に答えるとしたら『気が付いたらいた』であろう。

しかし、そんな答えをして許してもらえたるよつな雰囲気でもなく、道に迷つたにしては危険なところにいるのはおかしい、よほどの死にたがりなら喜び勇んで侵入するかもしだれないが、俺はそんなことをするような気違いだと思われて精神病院送りにされるのは止めだ、さて、何と答えたらいもやひ……

「答えないよつな理由でもあるのか?」

「そんな理由はない……です」

うん、こじね正直に言つてもいいだらつ実際何も理由がないから困つているんだし。

「ならば、なぜ居た?」

またこじに戻るんだな、このまおじや、らちがあかなこし、正直に答えて反応を見るとするか。

「気が付いたらこました」

その言葉を聞いてそのガキがため息をつく。

「嘘をつくなら、もう少しまともな嘘をつけ、あの場所はそんな簡単に忍び込める場所などではない、ましてや、気が付いたらいたなどあり得るはずがなかつ」

正論だ、こんなガキに正論を言われてる俺って……
でも、気が付いたらいたのは事実だ、そこはさうもない、しかし信じてくれないとなるとどうすればいいか……

「話す気がないのならばよい、持ち物を出せ、確認する」

ガキがそう言つと同時に護衛のおっさん、お盆らしきものを持っておれの皿の前にやつてきた、どうやら、この上に置けとこいつとらしき。

俺はポケットをあさり財布、定期入れ、チャリの鍵、ガム、そして携帯電話をお盆の上に置いた。

「見たことがないものばかりだな。財布の中の通貨も見慣れぬものであるし、いつたいどこの通貨だこれは」

ガキは財布をあさり不思議な顔をしながら、今度はガムに手を伸ばした。

「これはなんだ?」

「ガムです」

なぜこんな当然のことを質問するのかはわからないがとりあえずはまじめに答える。

「ガム?聞いたことがないな、いつたい何に使うのだ?」

「食べるんですよ」

ガムを知らんとは一体どんな世間知りあだよ。

「「つむ、 では貴公、 食してみる」

そうこうひど、護衛がガムを持ってきたので、俺は一粒を包装紙から取り出して口の中に入り込み、噛み始める。

「こつまで噛んでいる早く飲み込め」

「いや、 ガムは飲み込まずにこつまでも味わうもんですよ?」

ガムは飲み込んでも問題ないとは聞いたことがあるが、それでも飲み込むのは遠慮したい。

「せうなのか、 なら口の中に入れたそれはどうするのだ?」

「吐き出しますけど?」

「一度口の中に入れたものを吐き出すと?」

まるで変なものでも見るような田代ガキは俺のことを見つめじくる。

「はー、 そうですけど?」

「何とも、 おかしな食い物だ」

次に、ガキが手にしたのは携帯だった

「これはなんだ?」

いぶかしげに、携帯を持ち上げたガキは、携帯を開き、声を上げた

「な、なんだこれは！？」

ディスプレイが光つたことに驚き、ガキは声を上げる。

「携帯ですよ」

やれやれといった感じで俺は一応答える。

「ケータイ？」

ガムを知らないからこれも知らないだろつとは思つてたけど、驚いた拍子に、携帯を床に落とすのは勘弁してほしい。

床に落とした携帯を、恐る恐る拾い、なんだか小声でぶつぶつと、どうなつているとか、いいながら、しばらく眺めていたが、理解するのを諦めたのか、携帯を閉じてから、口を開いた。

「ふむ、とつあえずわかったことを話すと、お前、この国の人間ではないだろ？？」

いかにも自信ありげにガキはそう言い放つ。

「ソーリーがどこだかわからないから、何とも言えないですね」

もしソーリーが日本なら、俺はこの国の人間だし、違うのならば俺はいつの間にか拉致でもされたとしか考えられない。

「ソーリーは、ソーランド王国が首都ソリュードであるが」

あー、地理はあんまり得意じゃないんだよ、アーロッパかな？
まあ、とりあえず、日本じゃないんだな、なんとなくは予想してたけど。

「じゃあ、自分でこの国の人間じゃないですね」

俺は、嘘をついてもしようがないの正直に答える。

「では、とりあえず不法入国として扱つてよーな」

「いや、たぶん拉致されたんじゃないかと」

我ながら、「ここまで冷静に対応ができるものだと感づく、おもいへ
最初のインパクトがあの爆撃だったからだろ？」

「言ご分は、明日聞くとして、とりあえず、今日は牢屋の中で過ごすといー

牢屋といつなんだかいやな単語に対して俺は反応する

「うふ、うふと待つてくださいよ、拉致されたのに牢屋つて」

「拉致されたのならどのみち行き場はないのであいつ、なら、牢屋
の中にいたほうがまだよいのではないか？」

ああ、確かに牢屋なら少なくとも雨風は防げるし、飯も食えるだろ。
なんだよこのガキ意外といいところあるじやん。

「じゃあ、お世話をなつまーす

ちょっとだけガキの優しさを感じて軽く笑顔になる。

「笑みを浮かべて牢屋に向かうやつなど初めてだ」

眉を顰め、変なものでも見るような視線を向けながらそう言った
別に、牢屋に行きたいわけじゃないけど、ここはめんどくさいから
黙つておこう

「とつあえず、荷物を…」

荷物お代えしてもらおうと思ひ口を開くと、俺の言葉をひきつけて
ガキがしゃべりだす。

「荷物は預かっておく」

引き留めて返してもうおつとすらもむなし、ガキは護衛のつひの
一人を残してどこかに行ってしまった。

俺はそのあと、護衛のおつせんにつれられて牢屋の中にぶち込まれ
た。

第2話 大胆すぎるプロズンフレイク

俺は、特に手枷などを見るでもなく、意外と自由な恰好で牢屋の中へと入れられた。

簡素なトイレと机、ベッドがあり、思っていたより豪華だったことに少し喜んだが、そんなことよりも気になることがあった、この牢屋、二人部屋だつたのだ……

ここは話しかけるべきか、でも相手は毛布にくるまって、俺がこの牢に入つて来てからピクリとも動かない。明日には、事情を説明して解放されるんだろうから、わざわざ関わることもないかと思った、その時、突然男が起き上がり、顔をこちらに向け、話しかけてきた。

「ん？ 新入りか？」

その男の金髪は、ぼさぼさで肩まで伸び、顔は少しやせ気味で無精ひげが伸び、衛生的とは言えない格好で、見た目30代前半くらいだろうか、今は寝起きで寝ぼけているのか瞼は半開き状態だが、その双眸はきれいな青色をしていた。

「はい、今日入りました」

たとえ牢屋の中だらうと、目上の人には最低限の礼儀をわきまえないといけない、特にここではお互いに手上もしていないので、相手が凶悪ならば、機嫌を損ねた場合、ここを出る理由が、死体になつたからになつてしまつ。

俺が返答したのち、しばらく俺のことを見定めるように見ていたそ

の囚人は、眉間にしわをよせ、尋ねてきた。

「兄ちゃん、身なりも悪くねえし、礼儀もなってる、とてもこんなところに来るような人間にはみえねえがいったい何やつたんだ?」

俺は、気が付いたら不法入国扱いにされていたことを告げ、今の状況を言葉にしたことにより頭の中が整理されたことにより、大きな疑問が浮かんだ

なぜ言葉が通じるんだ?

ここが日本でないとしたら、明らかにおかしい日本語を母国語にしているのは、日本だけなのだから、ほかの国でここまで流暢に話ができるはずがない。

そしてその思いは、思わず口からこぼれた。

「なんだ、夢か」

「ん? なにかいつたか?」

あいにくもう一人の男はさつきから自分の机のあたりでガサゴソ何かをしていたので、きこえなかつたようである。

全くを持つて、ここまでリアルな夢を見たのは生まれて初めてである。

まあ、醒めない夢はない、そのつまこの夢も終わりを迎えるだろうなどと楽観的な考えにもどづいてのんびりしようとベッドに転がった時、夢の住人Aこと囚人が話しかけてきた。

「そだ、名前聞いてなかつたな、俺の名前はスキップつてんだ」

「この名前も俺の夢とこいつとは俺のセンスなのであらへ、まったく自分のセンスを疑うぜ。」

「ああ、橋本隆也です、よろしく」

夢の住人に、つい敬語を使う俺ってどうなんだろ?」

相手の差し出した手を握ろうとして、起き上がったとき、爆風で飛ばされた時けがした膝に、鈍い痛みが走った。

「あれ、痛い?」

俺のその言葉にスキップが反応する。

「なんだどうした?」

おかしい、これは夢だ、痛いわけがない、それにもし夢じやないとしたら、つじつまが合わない。

しかしそんな俺の考えとは裏腹に、これが現実であると訴えるかのように、膝の痛みは消えることはなかった。

さつきからどれほどの時間がたつたのかわからない、気分にしてみれば何時間も考えにふけっているような、そんな気さえする。

次第に落ち着いてきて、状況を確認するがいくら考えてもわからぬ、ただ一つ分かったのは、これが夢ではないだろ?といふことだけであった。

「おい大丈夫か?」

混乱する俺にスキップが声をかける。

「え？ 何か言つたか？」

混乱しててよく聞き取れずに俺は聞き返す。

「わざわざから急に固まつて、どうしたんだ？」

スキップは不思議やうに尋ねてくる。

「あ、いやなんでもないですよ」

俺は、ぎりぎり笑顔とともにうなづいた。

「やつが、ならここんだ、じゃあ、こせなりで悪いんだが」

俺はその時、ものすいじへ悪に予感しかしながら、そしてそれは当たるじとなる。

「 脱獄しないか？」

俺はその言葉を聞いて、やつのハンドルがこれだった。

「 あんたはバカか？」

失礼な」とは分かっている、しかし、どう考へても馬鹿だ、罪を犯していないのに脱獄なんかしたら、何かやましいことがあると思われて後々めんどくさいことになるだろ?に、なぜおれがそんなことをしなきゃいけない。

ただでさえ混乱しているのにさらに混乱をもたらすことをやむ
ればいいのか非常に悩む。

「いいじゃねえかよ、ロマンがあるだろ?」

「断る」

ロマンを求めるなら一人でやつてくれ、俺はそんな危険な生き方に
あこがれたことはない。

「しょーがない、じゃあ俺一人で行くわ」

そういう鉄格子のほうに、歩き出したスキップは特に、鍵やピッキ
ングの道具を持つている様子もない、いつたいどうするのかと思い
眺めていると、スキップは鉄格子を蹴った。

蹴られた鉄格子は、はめ込み式だつたらしく向かいの壁に衝突し、
派手な音を立てる。

俺はそれを眺めて呆然とするしかなかつた。

「じゃあなリューヤ、無実が晴れることを祈つてゐるぜ

そういうて駆け出したスキップを、突如として壁から噴き出した炎
が包み込んだ。

俺は、突然の出来事にただただ呆然としていた。

「あつちー」

そういうながら、炎の中からスキップが飛び出してきた。

「なんで生きてんだよーー？」

「こいつは「まざには」られなかつた

「ん? ビーフした?」

まるで何を言つてゐるんだといった顔をしてこちらを見てくるスキップ。

「今、完全に燃えてただろーー?」

「うん、熱かつた

スキップはまるで大したことがなかつたかのように言い放つ。

「熱かつたで済むかーー? ふつう焼け死ぬだろーー?」

「おいおい、あの程度じゃ俺の野望（脱獄）は止められねえぜ?」
ダメだこいつバカだ、そしてバカだ、圧倒的なバカだ。

「まあ、さすがにずっとあんなの耐えるのはきつそつだから、一旦作戦練り直すわ」

そういうて、スキップは自分で蹴り飛ばした鉄格子を持ち上げ、はめ込み、何もなかつたかのようにベッドに寝転んだが、蹴つた部分

の鉄格子が明らかに変形してこるので偽装する意味があるのかビックリ。

しばらくして、石造りの廊下を歩く「コロコロ」という音が聞こえ、その音は徐々に大きくなり、その音の発信源は俺の牢屋の前で止まつた。

「異常に反応があるから来てみれば、またお前か

おそれく看守である「うの」の男は、あきれたように言つ放ち、ゆがんだ鉄格子を見ながら、あーあなどとつぶやき始めた。

「おこおこ、おやつせん、俺がやつたつていつ証拠でもあるのかよ？」

「10日1回は脱獄してくるやせん、今更どうせやんなよ」

「こつ10日1回へりこのペースでこなことやつてんのか、少し看守のおっさんが哀れに見えてきた。

その後も、スキップの言い訳は続き、それに呆れた看守のおっさんは、もうやめるなどだけ言つてやつてこつた。

「リューヤ見たか、俺の巧みな話術で看守をだまして見せたぜ」

今のビコがだませていたのかわからないが、何か言つても騒がしくなるだけなので、俺はうなずきベッドの中にもぐつこくと同時にスキップに対しての敬意を捨てた。

その後運ばれてきた、パンとスープだけの晩飯を食い終わり、ベッド

ドの中にでもぐらりとだ俺は今日起しちゃうとや畠山の質問のことを考えてこねり方に自然と眠ってしまった。

第3話 異聞の時かつ井出しあやいけなこらじー

「おこりゅー、起きろ、朝飯だぞ」

「あと少し……」

俺は聞きなれない、声に対して返答をし、徐々に覚醒し始める頭で今の中の主を考え、だれなのか気づいたところで完全に覚醒した。

体を起こして、まわりを見渡すが、やはり昨日の牢屋の中であり、これが夢でないことが確定したことにより、一人落ち込む俺に、スキップが話しかけてきた。

「ほら、お前の分の飯だ」

「ああ、さんあゅ」

どんな状況であろうとも、人間、腹は空くものでとりあえず朝食を食い始める、量は大したことないので数分で食い終わり、また机で脱走計画でも考えているのであろうスキップをよそに、どんな質問をされるのだろうか、などと考えていた。

俺がそれを考えるのにも飽きてからある程度たつたころ、俺らの牢の前で看守が立ち止まつた。

「おい、そつちの黒髪の少年、事情聴取だ」

俺は、ついにこの時が来たかと意気込み、開けられた鉄格子の扉を抜けたところで、スキップが頑張れと声をかけてきたので、軽く返

事をし、看守の後をついて行った。

しばらく歩くと、看守は部屋の前で立ち止まつた、おさらばは」の部屋で取り調べを行うのであらう。

扉は鉄製でのぞき窓となるとこには、向こう側からだけ開けられる仕組みになつていて、鉄格子がはめられていた。

「不法入国の容疑で投獄中の少年を連れて参りました」

スッと、のぞき窓が開き、確認をすると入るよつて言つてきた。

俺は看守につれられてその部屋にはいり、周囲を観察すると石造りの壁の高い位置に窓が一つ、あとは机と椅子、そして入口の反対側に座るおそらくは昨日のガキ（この時も鎧などを外していなかつたが昨日見た格好とそつくりだったので）であろう人物を確認した。

看守は俺を部屋に入れるとそのまま帰つていき、俺を取調べするであらう男性が椅子に座り、俺に机を挟んで反対側の椅子に座るよう促した。

取調べをするその男性は、髪はウェーブがかかつた長髪であくるい茶色をし、目は金色をしていた、見た目20代前半くらいに見える。

「さて、まずは名前を教えてもらつてもいいかな」

取り調べといつので、もつと荒々しい感じで来るのかと思つていたが意外と優しい感じで話しかけられたことに安心感を覚える。

「橋本隆也です」

「なるほど確かにこの国では聞きなれない名前だね、じゃあ君のファーストネームはハシモトでファミリーネームはリューヤでいいのかな?」

「あ、逆ですファーストネームが隆也でファミリーネームが橋本ですか」

「つこつられて、ファミリーネームとか言ひましたよ。

「なるほど、名前の文化も違うとなるとかなり特殊な国の出身かな? ちなみに出身は?」

日本で特殊なんだろ? うか?

まあ、特殊と言わればそんな気もするが。

「日本です」

「うーん、聞いたことがない地域名だね」

なに? 日本を知らないだと? 日本って有名だと想つてたが違つたんだろうか……

「次に年齢を教えてもらつてもいいかな?」

「18です」

聞いた情報を紙に書き留めていたその男性は、しばらく手元においてあつた紙を読んでから話しかけてきた。

「入つている情報だと、演習場には気が付いたらいたつて話だけど

本当かな?」

「本当です」

嘘をつく必要はない、すでにそのことほ後ろでだまつてこりを見ているガキに話している。

「なるほど、じゃあ昨日後ろの人に話したことは全部本当なんだね?」

「はい」

「まこったな、まさか本当だとは……」

「ん? どうしたんだ?」

「何かまことにでもありましたか?」

「いやー、そのことが本当だつてことがわかつてしまつたから困つてこるんだ」

「どうこいつひだりだ?」

「はは、まだわかつてないようだね僕は洞察の属性の持ち主で嘘を見抜けるんだよ」

洞察? 属性? なんのことだ?

「まあ、晴れて君の無実が証明されたわけだよ」

なんかよくわからないが、もつときつて取り調べられると思つて、ただけに拍子抜けしてしまつたと同時に、無実が晴れて安心した。

「じゃあ、後の話は僕じゃなく後ろの彼女に頼むとするよ」

なるほど、後はあのガキと話せつてことだな……彼“女”？

「女だつたのか　！　！」

完全に男だと思ってただけに、驚きのあまり叫んでしまつた、反省している。

「女だつたら悪いのか？」

「あ、いや悪くはないです」

むじむじ勘違にしてて「めんなさいって感じだ、でもその胸じゅ……おつとこれ以上失礼なこと考えちゃかわいそうだな。

「まあ、よー」

そつこつて男と入れ替わるよつよ、俺の向かいに座つた

「じゃあ僕はこれでお暇をせてもひつよ、後の仕事がつかえてるんでね」

「つむ、感謝する」

男が部屋を出たのちに、田の前のガキ……もとて少女が話しかけてきた。

「まずは自己紹介と行こうか、私の名はエリス・ファンテール・フォン・グラント、グラント家が次女にして現在は、この第7演習場の指揮官補佐をしている」

あ、どうもと軽く返事を返すと、なんだかいぶかしそうな田で俺を見つめてきた。俺何か悪いことでも行ったんだろうか？

「とりあえずこれが今回押収していた品だ」

そういうて俺の持ち物を袋に詰めてよこした。

「まあ今回の件に関してだが、拉致被害者として本国に送り返すのが本来のやり方である」

うん、これで俺は帰れるわけだな。

「しかし」

え、なにがあるの？

「我々は日本という場所を知らぬゆえに送りかえすことができない」

「え、いや、調べれば……」

「すでにお前から聞いたときに調べたが我が国に日本という場所の情報は一切ない」

え？ どうゆう？ と、一矢うなんでもそりやないだろ？ てか調べた素振りなかつたじゃん？

「せ、世界地図ありますか？」

「待つておれ

そうこうと、しばらくして丸めた紙を持った男がやってきてエリスにそれを手渡した。

「これが世界地図だ

そういうて広げられた地図に乗っている地形は俺の知っているものとはかけ離れていた。

「うん、だろ？」

「これは本物だ」

「」で俺が昨日寝る前に思い付いた、最もありえないと思い一瞬で否定した考えが最もありえるものになってしまった。

俺はいま異世界にいる

もしそうなら、どんなありえないことも説明がつく、なによりも異世界に来たなんてことが一番ありえないのだ。

「なにか思うところがあるようだが話を進めてもいいか？」

その一言で俺の意識は深い思考の海から引き戻された。
正直な話まだ納得はできていないが、こんなことが起きたのならば生きるために何かをしなければいけない。

「あ、はい」

「今日は送り返す先がわからないので、特例として貴公を我が国の国民として受け入れようかと思つ」

「え、そんなことできるんですか？」

「本来ならばありえないが、担当者が私であり特例と認められるに十分な材料はある、まあそのための準備もあるゆえに少しばかり時間がかかる、それまでここには泊まる場所が牢獄しかないのとそこで過ごしてもいいことになるがかまわないか？」

「はい、まつたまきでません」

「では取り急ぎ準備をするので再び牢の中で待つてくれ」

俺は昨日いやな奴だと思つていたエリスに感謝しながら部屋を後にした。

生きるすべが見つかった、それはおそらく異世界に来たという特殊条件下ではかなりいいことであろう、しかし、まだ希望は見えたとしても周りは分からぬことだけである不安がないといえばそになるが、今はとりあえず喜んでおこうと思つ。

看守につれられてまた牢の中に戻つた俺は、スキップでびつなつかなどを聞かれそれに答えた。

「へー、じゃあお前ほんとになんもしてなかつたんだな」

「じてないって言ったよ? 信じてなったのか」

そういうとスキップはうなずき笑いながら話し続ける

「まあ、よかつたじゃねえか」

「そういうえばスキップは何でつかまつたんだ?」

「ああ、不法侵入だよ、一回脱獄つていうのがしてみたくて牢屋に侵入したら、そのまま捕まつちまつた」

そういうながら笑うスキップと呆れる俺、なんだか昨日から呆れさせられてばかりだなと思いながら、その後もスキップのばかな話を聞きその日はすごした。

第4話 天国と牢獄

あれから数日がたつた、しかしいまに俺がここから解放される様子はない、今頃日本の友達はどうしているかなどと考えながらベッドの上でのんびりと過ごし時々スキップのばかな話を聞く日々が続いていた。

意外なことに異世界に来たことはすんなりと受け入れられた、両親は今頃搜索願いでも出して大変かもしれないが、今の俺には帰るすべがない。

まあ、そのうち帰れるなら帰ろうとは思うのが、俺が考えるにそんな簡単なことではないだろう。

よつて、じつちの世界でのんびり暮らしつつ帰る方法を探そうと思うのだが、まず牢屋から出れないことにはどうしようもない。

いつものように昼飯が運ばれてきたとき、昼飯を運ぶいつもの人は別にもう一人いることに気が付いた。

「ハシモトリユーヤとこつのは君のことかい？」

そのもう一人の男性は、顔にはきれいに整ったひげが生え、背は180くらいで年は40くらいであるう、金髪は肩より少し下まで伸び先のほうがまとめられている、その眼は緑色をしており、いわゆる金髪碧眼である。

「はい、そうですが」

俺はなぜおれの名前を知っているのかを不思議に思いながらも返事

をする。

「どうも、Hリスの父のレインだ」

なるほど、あいつの父親か。でもなんでこんなところに？

「Hリスが君の国籍の申請をとつてくれるとこつただりつへ。」

うん、確かに言われた、何の音沙汰もないもんだから忘れられてないかと心配になつてたとこだ。

俺はその問い合わせし首肯で返す。

「実は、国籍を得るために君を預かってくれるといつを決めなければいけなくてね」

なるほど、俺は居候をしなきゃいけないわけか。

「それで、あちこちに掛け合つてみたんだが君の情報を出すとどうも首を縊には振つてくれなかつたみたいなんだよ」

そりや突然居候させてくれるよつなんといひなんてやつそつなによな。

「その場合どうなるんですか？」

「Hのままでは国籍は手に入らないからHから出してもひつわけこもいかないんだ」

そいつは困つた、Hのままだと一生牢獄暮らしじやねえか。

「え、じゃ……」

「まあ、もう少し聞いてくれ」

まだ何があるようなので、とつあえずは聞いてから判断しようと思ひつつ見る。

「それで、相をうひであざかうと呪うのだがどうかね？」

その言葉を聞いて言んだ

「何……？」

ちなみに言ひておぐが叫んだのはスキップだ。

「スキップ 静かにしてくれ」

俺にひとつは死活問題なので少し静かにしてほしい。

「だつてお前」ひとつ……じゃなかつた、この人つて……」

なんだか歯切れが悪い感じでスキップが何か言ひているが、俺は諭すよつな口調で話しかける

「ああー、もういいから少し静かにしててくれ」

俺は話の途中で突然叫んだスキップを黙らせ再びレインさんのほうに向きなおる。

「いいんですか？」

俺の問いに對してレインさんは笑顔で答える

「ああ、君さえよければ」

「やれりんで」

これで俺の異世界生活がスタートできる。
そんなことを考えてくると、よじでなんかぶつぶつと小声で言つて
いるスキップが話かけてきた

「まあ、よかつたじやねえか」

その言葉に感謝の言葉を述べ、お前も早くレインさんはと軽口を
たたいてみる。

レインさんの話だと、これからすぐレインさんの家に向かひり
く、俺はスキップに別れを告げて牢の中を出た。

そのあと廊下を歩いてくるとき、聞いた話だと俺はお前はコニー
ヤ・ハシモトとして登録されて、晴れてこの国の国民になれるやつ
だ。

そんな説明を受けながら、歩いてくるとレインさんはある部屋の前
で立ち止まりその部屋の中に入つていき、何もないその部屋の中で
立ち止まつた。

「あの、この部屋は一体？」

そうこうとレインさんは振り向き答える

「ああ、いま転移の準備をするから待っていてくれ」

そういうて数秒後俺の足元には円とその中に幾何学的な模様の描かれたいわゆる魔方陣が光の線によつて形成され、徐々にその光は強くなり、俺の体を包み込んだ。

あれこの感じつて前にも……そつだたしかあの演習場から突然移動したときの……

そうかこれが魔法つてやつなのかな、などと考えていると、俺はまたさつきとは全く別の場所にいた。

田の前に広がる風景を一言で表すならば“莊厳”的である。

左右に伸びる20ほどどの高さの白い壁、眼前に構える鉄格子の門そしてその奥に見える緑の芝生の中を走る真っ白な石畳の道、その途中には横に伸びる道や噴水まであるそしてその奥に見える家は細かな装飾の施された白い外壁、少し薄い色の青い屋根
その家は、家というよりもお屋敷といった感じだった。

驚き、呆然としている俺の耳に初めて聞く声が飛び込んできた。

「おかえりなわこませ、田那様」

その声の主は見た目50ほどであろうか、執事服に身を包み、銀色の髪は顔にかかるようにオールバックにし、立派なひげを生やした、まさに絵にかいたよつた執事がそこには立つていた。

「クロン、わざわざ出迎えすまないね」

そうレインさんが言つとクロンさんは軽く首を振る。

「いえ、とんでもござりません」

「彼は以前から話していたリューヤ君だ」

俺は突然紹介されたことにあわてながらなんとか自己紹介をし、それに対しクロンさんも返事をしてきた。

クロンさんは「こ」で家令（俺は何だかよくわからないが）この使用人をまとめる人っぽい）をやつてゐるらしい。

その後門を抜けあの遠くに見える屋敷まで歩くのだろうと思つていた俺に予想外の出来事が起つた。

「じゃあ、クロン頼む」

「承知致しました」

クロンさんがそういうと、一瞬だけ目の前が明るくなり次の瞬間にはさつきまで遠くに見えていた屋敷の目の前にいた。

今までの移動と違うところはとにかく移動までの時間が短いことである。今までは全身が光に包まれて徐々にその光が消えたかと思うと別の場所にいたが、今はカメラのフラッシュのように一瞬だけ光が見えたとおもつたら別の場所にいた。

まあ、そんな違いが何であるかなど分かるはずもない俺にはどうしようもないことであるが、俺もあれできなきかなあなどと考えながら、扉へ向けて歩き出すレインさん達に続き、扉をクロンさんが開いた。

クロンさんが扉を開きその扉の奥に見えた光景に、俺はただただ呆然とするしかなかった。そこには映画でしか見たことのないような使用者たちが並んで頭を下げるなどという、怪奇現象波にめずらしいものが待ち受けていた。しかもみんなで声を合わせておかれりなさいませってどんだけ統率のとれた集団なんだか。

「さあ、みなさん仕事に戻つてください」

そうクロンさんが声をかけると使用者の人たちは散り散りにどこかに行つてしまい、クロンさん自身も一礼をしてどこかに行つてしまつた。

そういうや俺メイドとか見るの初めてだな、などと見当はずれなことを考えながらその玄関というかエントランスホールを見わたすと吹き抜けに大階段、天井からつりさげられたでかすぎるシャンデリア、すでに俺の住んできた世界との差異を感じすぎて気後れすることすら忘れてしまう。

「リューヤ君、ここが今日から君の家となる場所だ」

そういうて話しかけてくれたがあまりの事態に俺はテンパつてしまつ

「よ、よろしくお願ひします」

緊張から少し早口になつてしまつた氣がする。

「もつと楽にしてくれ。わからないこともたくさんあるだらうけどそれは徐々に解決するとして、まずは妻のところにあこがつに行こうと思うのだが」

当然俺は断るわけもなくレインさんについていく。

家中の中での瞬間移動は使わないのかな、などと考えながら歩いていると扉の前でレインさんが立ち止つりノックをしたので、俺はレインさんの一步後ろで待機する。おそらくここがレインさんの奥さんの部屋なのだろう。

「どなたですか？」

扉の向こうから聞こえてきた声はきれいな声だった

「わたしだ」

やつれレインさんが言つた部屋の中から返事が返つてくる。

「あー、どうぞ」

レインさんが部屋の中に入つてないので、俺も続き一礼をして部屋の中に入る。

部屋の中で椅子に座つていた女性は、栗色の軽くウエーブのかかった髪が腰のあたりまで伸び、茶色の眼は優しげで、どちらかといふと垂れ目気味だろう。

本当にレインさんの奥さんなのだろうか？

20台といわれても全く疑わないであろう姿勢に軽く驚いてしまつたが、その落着きからは大人の風格があふれていた。

「どちらが前から話していた方ですか？」

その女性は小首をかしげる。

「ああ、そうだ」

「橋本隆也です、よろしくお願ひします

俺はそんなありきたりなあこせつをする、実際何を言えばいいかなど分からぬから仕方がない

「レインの妻のアマリアです、よろしくねリューヤ君」

アマリアさんはそういうながら微笑んでいた

その後レインさんがアマリアさんに話があるというので、俺はいつの間にか現れたクロンさんにつれられて、これから俺がすこす部屋へと向かった。

俺が案内されてきた部屋はまるで最高級ホテルの一室（当然泊まつたことないからわからないけど）のようで、この部屋を一人で使っていいのかという疑問さえ浮かぶほどに広かった。

クロンさんに大まかな部屋の設備の使い方などを教えてもらい、詳しい説明は後で部屋係のものが来るので、そのものに任せているということがわかった。

俺はすでに着替えもクローゼットの中に用意してくれているという話なので、とりあえず牢獄生活で二日一回しか入れなかつた風呂に入ることにした。

第5話 マナーはできる」となり知つておいたまうがいい

「あー、いいお湯だつた」

大理石の壁に、口からお湯を吐き出すライオンの飾り物、本当にこ
こは自分の使う部屋なのだろうか、などと考えながら体をタオルで
拭いていき、着替えをとりにクローゼットを開くと、中には豪華そ
うな服がずらりと並び、気兼ねなくきれそなのはYシャツのたぐ
いのものぐらである。

若干気後れしながらも何も着ないわけにはいかないので、その中で
一番質素な黒色のズボンと白のYシャツを着て、特に何をするでも
なくベッドに転がつた。

ベッドの上でボーッとしていると、ふと思いつき携帯を取り出した、
そして圈外なのを確認すると、携帯の電源を切り再びポケットにし
まつた。

俺が元いた世界では、何の変哲もない毎日を過ごしていた。

朝起きて、ダイニングにいる両親と2つ下の妹にあいさつをして飯
を食べる、平日なら学校に行くき、友達とバカな話をしたり勉強が
わからず困つたりしながらすゞし。夜は帰りの遅い両親の代わりに
晩飯を作り妹と食べる、晩飯の時は特に妹と悪いわけでもないから、
食事中はお互いに興味あるアーティストの話や、免許を取つてから
は友達と遊びに行くから車出してなどと頼まれたりもした。そのあ
とは宿題なりなんなりをしてすゞし就寝、また次の朝が来る、こん
な普通の日常が俺にとつては楽しく、大切なものだつたのだと今にな
つて築かれる。

みんなは今頃どうしているだろうか？

きっと友達や家族は突然消えた俺のことを心配してくれているであります。

そういえば大学は受かっただらうか？
受かっていてもどうしようもないが一応がんばって勉強したのだから受かっていたらいいな。

なんで今、俺はこんなところに……

ノンノンノンノン

俺はノックの音で目が覚めた、どうやらこのままにか寝てしまったようだ。

「あ、どうも」

「失礼します」

扉の向こうから聞こえた声は女性のものであり、俺は緊張して、なぜか気を付けの姿勢で扉が開くのを待った。

扉を開け入ってきた人物は、髪はショートで色は水色、目は海のように澄んだ青色をしており、その服装はいわゆるメイド服を着ていた、歳はおそらく俺とさほど差はないだろう。

「リューヤ様の部屋係に任命されました」コイと申します、以後お見知りおきください

「どうもお願ひします」

「どうもお願ひします」

まさか女性が部屋係になるなんて思ってなかつた俺は少々戸惑つてしまつた。

その後、毎日の基本的な生活リズムなどを細かく教えられたが、そんなのをすべて覚えるわけもなく何度も聞き直しながらようやく覚えた。

「では、何か質問等はありませんか？」

「いや、特にはないかな」

俺はミリィの敬語に堅苦しさを覚えながら、これから慣れていけばいいかななどと思いながら、苦笑いをする。

この後すぐご夕食だといつので、おれはミリィに連れられて部屋を出た。

俺が連れられてきた部屋は俺の予想していたとてつもなく長いテーブルなどではなく、意外と普通の家庭にあるものより少し大きいくらいのサイズであった。

すでにレインさんとアマリアさんは座つており、俺はミリィに案内された席へと着く。

俺が席に着くとミリィは一礼して部屋を出て行つた、それを視線で見送つた俺はまだ空いている席の人物をテーブルマナーつてどうだつけなどと思いながら待つ。

それから1・2分ぐらいして、部屋の扉が開く。

部屋に入ってきた女性は、髪は明るい茶色でストレート髪とは背中の
の中ほどあたりまで、目の中はアマリアさんと同じ色をしており、
その立ち振る舞いはいかにも御令嬢といった気品のある物腰である
が、その雰囲気は柔らかなものでなんとなく親しみやすさを覚える、
歳は俺と同じか少し上くらいであろう。

「ライラ、そこに座っている青年がリューヤ君だ」

レインちゃんにライラと呼ばれた女性は俺のほうを向く

「どうも、長女のライラです」

ライラはそういうと、スカートをすつと摘み貴婦人の礼をする。
俺も自己紹介をし、一礼して再び席に着いた。

レインちゃん曰く、まだ一人来ていらないらしいので俺は、レインちゃん
の話を聞きながらその人物を待つ。

それから5分ほどたつた時、突如として扉がすごい音を立てて開いた。

「なんとか飯の時間には間に合つたか」

入ってきた男性は髪は栗色のショート、目も茶色をしており顔はイ
ケメン、なんとなく体育会系の雰囲気をまとっている。おそらく走
ってきたのだろう、肩で息をしながらテーブルの空席に向かう、し
かし途中で俺の存在に気づくと、満面の笑みで俺へと歩み寄つてく
る。

「お前が噂の居候か、俺グレイってんだよろしくなリューヤ

そういうながら俺の背中をバンバンと叩いてくる。

「よ、よろしくお願ひします」

背中が少しひとりひりするが、そういうなんとか笑顔を作ったがおそらくはひきつった笑顔になつていただろう。

「わつにえば、何で名前を知つてこるんですか?」

「ああ、親父から聞いた。そんなことよつもつと気楽に行いつか、敬語なんかやめてせ」

グレイのは少しばかり軽すぎやしないか、などと思ひながらまた苦笑いを浮かべていると、レインさんが口を開いた。

「グレイもうそれくらいにして席に着きなさい」

「つまでもあれに絡んでいるグレイをレインさんがたしなめる

「へーへー」

グレイは軽く手を振つて自分の席に着く

「リューヤ君悪いね、グレイも悪気はないから許してくれ

俺が背中の痛みを氣にしてることに気付いたのか、レインさんが苦笑いをしながらさりげなく言つてくれる

「あ、はい、全然大丈夫です」

おそらくは「これがグレイの素なのだと思つ、いままでなんとなくみんな緊張感を持つて接していたが、グレイに関しては早くに打ち解けそうだ。

その後、次々に運ばれてくる食事を、おぼろげな記憶を元に学校で学んだテーブルマナーを思い出しながら、なんとか食事を食べていく。

食事中の会話でリライラは俺と同じ年、グレイは「一つ上な」ことが分かった。

そのほかにもいろいろ言つていたがこの国のことになると向一つわからず、俺のことについてもいろいろと尋ねられたので、できつる限り頑張つて答えた。

食事は終わり、全員の皿の前にコーヒーが置かれる。

食事の作法や食材も向こうの世界とほぼ変わりはないようで、わからぬところは見よう見まねで何とか乗り越えた。

俺はゆっくりとコーヒーを飲みながら話を続ける

「では、リューヤ君の居たところでは魔法といつものはないのかね？」

多少驚いているような口調でレインさんが尋ねる。

「名前として聞いた」とはありましたが、実際に使っている人はたぶんいなかつたです」

魔法などは空想であるそれが当然であった俺のところの世界のほうが驚きである。

「じゃあ、リューヤも魔法つかえねえのか？」

まるで使えるのがさも当然だといわんばかりにグレイが訊いてくる

「うそ、使えない」

そこでも一瞬の沈黙、この世界では魔法は当然のものであり、生活するうえでも使っていくのが当然らしい、つまり魔法がつかないとここに生む世界では異常極まりないのである。

沈黙を破るかのよつて、想を出したのはアマコアさんだった

「では、よければ魔法を学んでみてはいかがかしら？今は学校は夏季休業ですけどしばらくすれば始まりますし、それまでは家で教えますよ？」

魔法を使えるようになる。

もし魔法が使えるのならば使つてみたい、それが俺の本心であった。

その後もその話は続いた、夏季休業中に編入試験に受かるように勉強をし、その後は学園で学んでもらつてこのことで話はまとまった。

さっそく明日から勉強を始めるところとなので嬉々として部屋に戻り、ベッドに入ったがなかなか寝付けなかつた。

第6話 大学受験よりも頑張った気がする

俺が勉強を始めてからはや五日、魔法はおろか編入に必要なありとあらゆる教科をいまだに手を付けてすらいない、それはある重大な問題が原因となっている。

勉強開始日

コンコンコンコン

俺はその田ノックの音で田を覚ました

ああ、俺レインさんの家に住むことになつたんだっけ。
目が覚めて見回した景色が俺の記憶にないものだったので一瞬、『
こいはどこだ?』と思つてしまつた。

コンコンコンコン

あ、何か言わないと入つてこないのか

「あ、どうぞ」

俺はそう言しながら状態を起こす

「失礼します」

俺の返答を聞き、ミリイが一礼をして部屋に入つてくる

「朝食の時間なのでお迎えに参りました」

やつはわれて軽くあわてながら返答を以る、どうせ俺のことだから
だいぶ寝過ぎにしてことじだひつ。

「今、着替えます」

そつこつて着替えよつとするが、//コイが部屋を出て行かない。

「あの//コイさん、着替えますよ。」

俺は出て行つてほしくてそつこつたのだが、//コイは小首を傾げながら口を開く

「手伝つたほつがよろこびよつがうか？」

「こやなうでやつまつせんがんのー。」

まさかの提案に俺は驚き少し大きこ声を出しつしまつ。

「何がおかしかつたですか？」

やつは//コイはまたも小首をかしげる。

「おかしこよ、着替えるから少し部屋の外で待つてよ

「何故？」

本当に理解ができないといった感じで眉をひそめる。

「こ、いいから外で待つてくれ

セツコ「リイは洪々といった感じではあるが部屋の外に行つてくれたので、俺は手早く着替え、部屋を後にした。

食堂に向かう途中、俺はふと思いついたように話しつけ出した

「セツコ、朝だけだぞ」

「なんでしょうか？」

ミコ「は顔だけをこぢりに向けて反応する。

「ノックしても起きてこなかつたら部屋の中入つてきて起こしていいよ」

俺は普段、目覚まし時計3個相手に熟睡する猛者であるため今日起きたのでさえ奇跡に近い。

「かしこまりました、さすがに私も20回ノックしても起きなかつたときは部屋に入ろうか迷いましたが、次回からはもう少し早い段階で部屋の中に入らせていただきます」

訂正だ、別に奇跡など起きてはなかつた、単にミコの根気が俺の眠気に勝つただけだつた。

「セツコしてくれ、さすがに申し訳なさすぎる」

俺が申し訳なさセツコ、セツコも思い出したように口を開く

「やつしょれば、今日からの勉強は私が見させていただぐ」となつておりますのでよろしくお願ひいたします」

「 ジョルジ、よろしくお願ひします」

そう言つて頭を下げあつ俺たちだが、なんだかミリイの礼は様になつてゐるが、俺の礼は今まで同様にぎこちない、この様子をはたから見たら俺はよほど情けないだろつ。

あとでマナーとかも学んだいたほうがいいなあ、などと思つてゐるうちに食堂につき、すでに集まつていた4人にあいさつをして席に着いた。

飯を食べ終わり、部屋へ帰るとすぐミリイが大量の本を持つてきた。

「 ジョルジ、今日から編入試験までにリューヤ様に学んでいただぐ分の資料です」

そういうて、平然とした顔でミリイが言つてくるのに對して俺は驚きを隠せない。

「え、これ全部?」

「はい、全部です」

少し不安な疑問が頭によぎりそれを尋ねる

「 ちなみに期間は?」

「今からいつつ日間ですか」

ああ、受験戦争を乗り切った俺にやがて過酷な試験を課すとは、どうやら「ひいじ」は地獄のようだ。

とりあえず嘆いていても始まらないと思って、一番上の一冊を俺は手に取り開いたところで俺は固まつた。

「これ何?」

俺の質問に対しミリィが答える。

「歴史に関する参考資料です、ずいぶんと簡単にまとめていると思いますが」

残念ながら俺の云えたいことは伝わっていなかつたようだ。

「いや、やうじやなくて……」

「なんでしょうか?」

「この文字何?」

「え?」

そう、俺はこの世界の文字が全く読めなかつた。

さすがにこれには普段冷静なミリィも驚いたよつて顔を出して驚く。

「」の言語に名前などはありませんがえて言つながら共通語、昔はあくの言語があつたと聞いておりますが、今はほとんどの国でこ

の言語が公用語として使われていて残りの国でもこの言語を学ぶ」とことなつているはずですが?」

まさか知らないんですね?でもこいつは尋ねてくる//コイだが俺はここの文字は知らない。

「俺の住んでいたところは、こんなよくわからない記号みたいな文字はなかった」

当然だ異世界なのだから、言葉が通じるから文字も読めるものだと思つて油断していたがこれは3つ曰じや無理かも?……

「わかりました、文字が読めなくてはなりませんので言語を学ぶところから始めましょう」

少し困った風にそつこつと、//コイは部屋をでて10分後数冊の本を持って帰ってきた。

「まずはここの本を読めるようになつていただきます」

そう言つて渡してきた本は、簡単に言つて中学生の時に初めて渡された英語の教科書のような感じで、おやぢく会話形式と思われる文章が書かれている。

「これが終わったら次に書く練習をして、その後はほかの勉強をしながら少しづつ覚えていただきます」

「の日本から俺の地獄の日々は始まつた

すでに昨日10時間以上も言語の勉強をし疲れ切った頭にさりげなく言葉を詰め込んでいく。

「えつとこれなんだつけ？」

「俺は本の中の文字の一つを描きして書い。

「その文字は水です、さつかも闇きましたよその単語」

この世界も言語は発音する言葉の順にそれに対応する言葉を並べてはめていく、この点は英語などよりも日本語に近い形であるが、一文字で一つの単語の意味を表す漢字のような文字と発音をそのまま文字にしたいわゆる平仮名のような文字の一類類があるところまで似ているのだが、その文字の形が奇妙すぎて覚えられない。

なんとか平仮名のような文字は昨日で覚えたが、それ以外に最低限必要だと言われた別のほうの文字を覚えられずに悪戦苦闘しているのが現状である。

「なあほんとにこれ全部覚えなきゃいけないの？」

あまりの量に軽く弱音を吐くように尋ねる。

「当然です、これでも1万語ほど削っているんですよ？」

「それでも3万語もあつたら無理だろーー？」

もつただ野口になつてているような気もしないが朝から晩まで勉強づけなのだから多少心が弱つてもおかしくないだろう。

「頑張つてください、それが読めないと勉強ができません」

そして「」の口もまた夜中まで俺は勉強を続けた

開始から4回

「や、やつとだ、やつと全部覚えたぞ」

俺が文章を読めるようになつて喜んでいる横で読書をしていたミリィは本をパタンと閉じ俺に大量の紙とインク、やつとペンを渡してきた。

「では、今度は私が言つた文章を書いて行ってください」

俺の喜びはその一言で搔き消え、背伸びをしていた俺は固まる。

「へ？」

俺の気の抜けた言葉に対し、当然だとしてもこいつのようになつたら、次は書けるようになつていただくと
は言い放つ

「最初に行つたはずですが、もつ忘れましたか？読めるようになつたら、次は書けるようになつていただくと」

俺はそこで思つた疑問を口にする、多少声が大きくなつたがしそうがないと思つてほしい。

「なんで、読みと書き一緒にやらないんだよー？」

その問い合わせしてミリィはまるで気にしていなかのよう答える。

「読めないものは書けませんし、それだとただ写すだけになるじゃないですか？書いただけで書けるようになつたと、勘違いされても困りますので、このような方法をとらせていただきました」

その後も俺はとにかく書いた、しかし、覚えてない文字が多い、本当にこのまま勉強など始めるのだろうか？

そして、現在に至る

この前までミミズの張つた後にしか見えなかつた文字、それ今、俺は苦戦しながらも書いていく。人間やれば意外とできるものだなどと思いながら、俺はひたすらリイの言つ文を書き続けた。

コンコンコンコン

「じうじー」

俺はペンをいったん休めて返事をする。

「失礼します」

「おー、頑張つてるか」

一礼して入つてくるクロンちゃんなぜかその後にグレイが付いてやってきた

「検査結果が届きましたので持つてまいりました。」

何のじとだつたかと思ひ尋ねる。

「検査結果?」

「数日前に少々、血をいただきましたがそれから魔力の固有波形、固有属性を検査させていただきました」

ああ、あの時の血か。

確か、ナイフで手のひらをきつて血を採取するとかいつから逃げ回つたけど、すぐに捕まつて結局血をとられたな。

まあ、魔法で傷はすぐふさいでくれたし、切れ味がいいおかげでほとんどいたくなかったけど、切られるつていうのはさいきぶんはしぬかつたな。

「波形のせうははお話ししても伝わらないと想こますので血をせいでいただきます。それで属性のほうですが……」

部屋全体に緊張が走る

「保存属性と判明いたしました」

第7話 怖い次女と頼れる長男 え、長女？完璧じゃないの？

魔法

この世界における魔法は大きく分けて2種類に分けられる自然の中に存在する魔力と自身の魔力を混ぜて発動させるものと、自身の魔力の持つ力のみで発動させるもの。自然の中に存在する魔力は火、水、風、土の四大属性と光、闇があるが自身の属性が光およびそれに付随するものに属さないものは光の魔力を感知できない、闇も然り。

前者は総体魔法とよばれ誰が使っても、強さや効果の大小をふくめず、同じ効果が得られる、しかし、発動のためには、その魔法の本質を理解し、それを明確にイメージすることと、自然にあふれる魔力の波長を、自身の魔力のそれと同調する技術が必要となるため発動にはたいてい多少の時間がかかる。明確なイメージと本質を言語化した詠唱を用いるのが一般的である。

後者は自身の持つ魔力の固有属性によって効果が異なり、その属性の種類は基本型となる四大属性をはじめ光、闇さらに四大属性の変質型の氷や雷といったものを含むものと、特殊型と呼ばれる再生、洞察などのようなものの一通りがあり、その種類は数えきれない。こちらは発動にかかる時間はほとんどないが、総体魔法に比べ魔力の消耗が激しいのが難点である。

人間は魔力を生まれたときは持つておらず、大抵が自身の固有波長と波長が近い親などによって体に魔力を注ぎ込んでもらうことによつて覚醒する。これは別に波長が似ている必要はないが波長がかけ離れている場合ひどい吐き気や頭痛などの拒絶反応が出て、子供ならば耐えられずに精神が崩壊することもありうる。

この説明を受けたのが、勉強を開始した日である。そこで、固有波長と固有属性を調べるからと血を採られたわけである。

そして現在

「保存？」

俺はそれがどのようなものなのか理解できなかつた。

「はい、この属性についての詳しい説明は、のちほど魔法研究所より資料を取り寄せておきます」

つまり、クロンさんもわからないうことか。

「ありがとうございます」

そんな俺たちのやり取りなどまるで気にしてないかのようだ。グレイが割り込んでくる。

「なー、クロン結局、誰の波形がリューヤの波形にいたばん近いんだ？」

なぜかわくわくしているような感じでグレイが訪ねたのに対しても、クロンさんは手に持っていた紙を眺めながら少し考える

「そうですね、これだとエリスお嬢様が一番近いかと」

エリスつていうとあの時のちびっ子か。

「なんだよ、俺じゃないのか」

一瞬残念そうにしたが、すぐに想につけたようにグレイがしゃべりだす

「でも、Hリスはまだ実地訓練中だろ?」

「はい、明日戻られる予定ですが」

その言葉を聞いた瞬間にグレイが「ひりに振り向き口を開く。

「なあ、リューヤ苦しくても気にしないなら俺がお前の魔力、覚醒をさせてやる」

「明日を待ちます」

子供なら精神崩壊起らすって言つてゐるのに、そんな苦痛気にしてわけがない

そして話が終わるとクロンさんは一礼して部屋から出ていき、グレイはなんだかいじけた感じで部屋を出て行った。

「おし、じゃあ明日に備えて寝るかな

そう言つて、立ち上がりベッドのまゝに向かつて

ガシツ

俺は腕をつかまれ立ち上まり、ゆっくりと振り向くと、そこには怖

い笑顔のミリィがいた。

「まだ、終わつてませんよ」

何やうにふれつちやーのよひなものを感じて俺はあわてる。

「じょ、〔冗談に決まつてゐるじやないか」

今寝たら、どんな悪夢が待つてゐるかわからないので俺は素直にまた勉強を始めた。

3時間後

「まあ、大体は大丈夫になりましたね。明日からは本格的に勉強を始めるので今日はしつかり休んでおいてください」

俺は、脱力し椅子の背もたれによりかかる。

しばらくくわづして、いとこつの中にミリィはになくなつていたので、俺は風呂に入りベッドの上に転がつた。

明日から魔法がつかえるという期待と、全く知らないことを勉強することへの不安を心の中に抱きながら俺は眠りについた。

「…モ…モー」

「…モ…モー」

キーーン

「うわー

俺は突然鳴った高音に驚いて目を覚ました。

「おはようござります、リューヤ様」

何もなかつたかのよつ//リィはいつものよつに挨拶をしてくる。

「ああ、おはよー」

俺は片耳を押さえながら、起き上がり着替えると告げると、ニコイ
はすぐに理解して部屋の外に行ってくれた。

しかし、こつたこさつきの音はなんだつたんだ。

そんな疑問を覚えながらも、俺は着替え食堂に向かつ。

俺は食堂に足を踏み入れてすぐに、見慣れない人物がいつも俺の座
つている席の隣に座つてゐることに気が付いた。

その少女は、ウェーブが掛かつた金髪を背中の中ほどまで伸ばし、
その碧眼は少し釣り目氣味で多少近寄りがたい雰囲気を持つてゐる
が、どんな特徴よりも背が小さいことが目立つ。

150cmあるのだろうか？今は座つてゐるからわからないがおそらく
150cmあるのだろうか？今は座つてゐるからわからないがおそらく
150cmあるのだろうか？今は座つてゐるからわからないがおそらく

「やあ、ココーネ君おまけに。」

俺に気が付いたレイ恩さんがその声をかけてくる。

「おまけにやることある。えっと、この子は？」

俺がレイ恩さんにつぶやくとその子が口を開く

「っこ先田会つたばかりなこの、もつ忘れたのか？」

つい先田っそれにこの少し偉かつた喋り方もしかして……

「H、エリスか？」

俺は確信が持てないながらこの世界で知つている名前を囁いてみる。

「こきなり呼び捨てか随分と礼儀がなつていないのでな、ハシモトリユーヤよ」

ああ、やつぱりつか。

「あ、悪いじゃあ、エリスちゃん？」

やつぱりHリスはすごい勢いでこからを睨んできた

「もつ一度やつ呼んでみる、貴様の口をあけなこようとしてやる

その時の声色からは明らかに殺気が感じられた。

「あ、はい」

こんな小さこ少女の氣迫に氣圧されるなんて、俺つてつべづべダメなやつだな。

「呼び捨てでいい」

そう一言だけ叫び、エリスは俺から視線を外し正面を向いた

「コヨーヤ君、エリスは口は悪いけれど根はいい子だから仲良しくしてやつてくれ

「父上、私はこのよつなものに仲良くなれる必要などありません」

それを聞いて俺が苦笑いをしながら席に着くと、扉が開きエイラがやってきた。

俺はいつも道理あいさつをし、その後にやつてきたアマリアさんとグレイにもいつも道理に接したのだが、なぜだらう俺の横でエリスがすうじい眼光で睨んでくる。

食事中に会話をしても、時々背中に寒気が走るよつな気がした。

食事を終え食堂を出て少し歩くと、俺を呼び止める声が聞こえた

「ハシモトコヨーヤ、話がある」

結構怒っている雰囲気のエリスを見て、俺はコヨーヤに先に部屋に行つておいてくれと伝える。

十分にコヨーヤが離れたのを確認して俺は口を開く。

「んで、なんだ？」

そう尋ねるとエリスは狩りを纏わずに口早に話し出す。

「今日、貴様の兄上と姉上に対する態度を見ていたが少し馴れ馴れしくしゃべではないか？」

「グレイとライラに対する態度？」

別にいつもと変わりわないし特に変なことをしたつもりもない。

しかし、エリスの怒りは収まる様子がなく声を荒げる。

「貴様のような者が、姉上や兄上のような高貴なものに対して敬語を使わずに話す」と自体が不敬だと言つてい
「

その言葉をさえぎる大きさで誰かがエリスを呼ぶ。

「エリス」

声のしたほうを見るとグレイが一歩一歩歩いてきていた。

「兄上何か用でしようか？」

エリスが気まずがつてひきつたのにに対して、グレイが肩をすくめて答える。

「あんな、大声で叫んでたらだれでも気づくっての」

そう言わるとHリスは顔を伏せる。

その様子を見てグレイは優しく語りかけた。

「お前はつコーやが俺らのことをバカにしてることと思つて怒つているんだな？」

「はい、この者は……」

「それは違うんだよ、リコーやは初めて話した時は敬語を使つていた。でもそれじゃあ仲良くなれないんだ、だから俺がたのんで敬語をやめてもらつたし、ライラだつてそのまゝが気が楽なはずだ」そう言つて、Hリスの頭をなでるグレイは何だかいつもと違つてしまつかりしているように見えた。

「じゃあ、Hリス俺はリコーやと話があるから先に部屋に戻つてくれ」

そうこうとHリスは少し不満そうではあるが部屋へと向かった

「グレイお前本当に兄貴なんだな」

「なんだそれ？」

グレイはつものよひに無邪気に笑つ

「まあ、俺もふだんはふざけてるよつて見えるかもしねいけど、一応あいつらの兄貴だからな」

「見えるんじゃなくてふぞけてるんだろ?」

「ちがいねえ」

俺らはお互に笑いあつた

そこでグレイが少しだけ真面目な顔になる。

「昔はエリスももつと可愛げがあつたんだが、いつのまにかあんなふうに育つちまって。今回のことだって、俺らのためを思つてやつてくれたことなんだ、許してやってくれ」

「わかつてゐよ、家族思いのいい妹じやねえか」

「じいりやお前、自分の部屋帰れるのか?」

「あつ……」

「連れてつてやるよ」

そうじつた時のグレイはさつきのよつな頼もしさに兄の顔をして微笑んでいた。

第8話 中國4000年の歴史?ぬるいな

俺が部屋に変えると早速勉強が始まった。

まずはこの国の歴史の勉強なのだが、次々と出てくる長い名前の人たちの名前を覚えるので一苦労、さらにわけのわからない地名ばかりで頭を抱え、この国は約7000年の歴史があるせいで呆然自失に陥った。

「無理だ、ちなみに聞いておくが今何年だっけ?」

「今は、世界歴で1万と7865年ですね」

「世界史は一万八千年分も覚えることがあるのか……」

「最難関となるこの歴史が終われば後は数学、魔法学、言語学などは戦闘訓練で終わりですから頑張ってください」

「俺、数学ならたぶんできるよ」

本当ですか?と疑われながらミコイが差し出してきた本を手に取つて驚いたが、内容はまるで中学生の数学であった。

この程度、俺にとっては何の問題もないといふことを伝え、一教科勉強しなくてよくなつたことに胸をなでおろす。

「では、歴史を頑張りましょう」

その一言で、俺の胸に絶望が舞い戻ってきた。

俺がこの国の歴史を学んでわかつたが、この国においては化学は全くと言つていいほど発展していない、しかし、代わりに魔法学が発展し、魔力というクリーンエネルギーによって人々の生活は成り立つており、地球のような環境問題は発生していない。

しかし、この世界においては魔物というものがおり、それらのせいで未開発の土地が多い。

魔物についてミリィに聞くと、基本的なところはほかの生物と変わらないが体内に異常な量の魔力を保有しており、非常に強靭な体を持ち、ほとんどの魔物はそれを制御できないため攻撃的になるということを教えてくれた。

同時に、体内に生まれながらにして魔力を持つ人種を魔族と呼び、彼らは自然の中にある闇の魔力を感知でき、約4000年前までは人間と争っていたが、現在は友好的な関係にあるということまで教えてくれた。

その後も勉強を続け、夕食を食べに行き、食後にコーヒーを飲んでいるとクロンさんが話しかけてきた

「リューヤ様、魔力を覚醒させるための準備が整いましたがいかがいたしましたよ？」

俺はその言葉を聞いて思い出し反応する。

「ああ、そういえば今日やるつて言つてたの忘れてました」

はつきり言つて、今は歴史のこととて頭がいっぱいだったので忘れて

いた。

けれど、思い出したから」はやつておきたい

「お願ひできますか？」

「かしこまりました

そういうえばエリスの協力が必要とか言つていたが、協力してくれるのだろうか？

俺は気になつてエリスのほうに視線を向ける

「安心しろ、朝の件は私のほうに非があることは分かつていい、ここで黙々をこねるようなことはしない」

ひとまずは安心できそうだな。

そのあと俺はクロンを元に戻されられてある部屋につれてこられた。そこには魔方陣が2つ描かれておりその中の一つに入ることに促される。

「少々きつこでしうが頑張つてくださいませ」

そつこつてクロンさんが魔方陣の縁に触ると、魔方陣は発光を始め、俺の体は動かなくなつた。

「あれ、体が動かないんですけど？」

俺が不安な声色で尋ねるもクロンさんはいつも変わらぬ口調で返

答する。

「魔力を覚醒させるのは魔方陣の中から出ていたたとて失敗してしまいますので暴れられないように拘束させていただいているのです」

「いや、暴れたりはしない予定ですけど」

「暴れたところでメリットがないのだから暴れるわけがない」

「そんなことを言つてるとエリスがもう一つの魔方陣の上に立血口を開く。」

「暴れるつもりがなくとも、痛みにより暴れてしまつから拘束しておるのだ、それぐらい理解しろ」

その言葉に俺は顔が引きつる。

「え、そんなに痛いの？」

「親の魔力で覚醒するならともかく、親族でない者の魔力で覚醒させるのだそれなりの苦痛であることは覚悟しろ。ちなみに、私は5歳の時、母上に手伝つていただいたがそれでもかなりの苦しみを伴つた」

「あ、ちょっとまって、心の準備が……」

俺の頼みはむなしく切り捨てられる

「貴様も男ならば潔くしろ」

そういうと、エリスの乗っている魔方陣が光りだし、俺の乗つている魔方陣の光も一段と増した。

「ぐつ、頭いてえ」

突如として襲つてくる頭痛、それは徐々に強くなつていく。

「あ、くつ……がはつ……」

すでに俺は言葉など喋れる状態ではなかつた、あまりの痛みにすでに言葉にならない声を出し続けて耐える。

氣絶でも楽なのだろうが、なぜか意識は覚醒していく。

頭の中の考えはすべて痛みによつてかき消される、すでに痛みは頭痛だけでなく体中に広がつていて、おそれく拘束されていなければ魔方陣の上から飛び出していたであろう。

あれからどれほどの時間がたつたかわからないがすでに口からは音が出ず、ただただ苦しむ。

苦しみ続けていた俺だが徐々に痛みが弱くなつていいくのを感じ、そしてそれから数秒後痛みは消え去りそれと同時に俺は気を失つた。

「あ、あれここは

「おまよつぱいぢこまよ」

俺はいつもの部屋にいた

「俺たしか魔力の覚醒させた……気絶したような気が」

「はい、リューヤ様が氣を失いましたのでクロン様がお部屋まで連れてきてくださいました」

俺は徐々に頭がはっきりとしてきて昨日のことを思い出す。

「ああ、そつか」

「朝食のまつばじついたしまじょうか?」

そう言われて氣を失つたせいで昨日風呂に入つていないうことに気が付く。

「出来れば汗を流したいから、後でまた迎えに来てくれるかな?」

「かしこまりました」

そう言つて、ミコイは部屋を後にする

俺は、汗を流し着替えまたベッドの転がる。

そこで体の中に何か変なものがあるような違和感に気付く。

「これが魔力か?」

つい、思つたことを口に出してしまつた。

「それが魔力だと思つんだつたら、それなんじやないか?」

俺は突然声をかけられて驚く。

「「つおつ、グレイ」いつきたんだよー!?」

「お前がベッドに寝転がつたあたりかな」

俺はそれを聞きため息を吐く。

「全く部屋に入る時はノックくらいしてくれよ」

俺の頼みを聞く気が全くないような感じでグレイが口を開く
「そんなことよりも体内の魔力に気付いたら次は外にある魔力に気
付けるよ」にならないとな

「外の魔力か……何も感じないな」

俺は何か変わつてないかと思い周りに意識を集中させるが全く何も
感じられなかつた。

「そんな簡単に感じれるもんじゃないからな」

早く魔法を使ってみたい俺はグレイに尋ねる。

「なんかコツとかないのか?」

「ないな、とにかく集中することだ」

それを聞き軽く落ち込む。

「しょうがない頑張つてみるか

その後、ミリイが迎えに来るまで頑張つてみたが結局何も感じられずに終わった、その日はそのあとはいつも道理に勉強をして過ごし、この国の歴史の「一九三〇〇〇年ほど」といふまで学んだ。

二日後

なんとか、コーランド国の歴史の勉強を終え、いつたん休憩をしていると部屋に何か紙を持ったクロンさんが訪ねてきた

「どうかしましたか?」

背もたれによりかかりだらけていた俺は背をただして尋ねる。

「保存の能力に関する情報が入りましたので持つてまいりました」

俺はそれを聞き少し心が踊つた

「あらがとうござります」

魔力を覚醒させたはいいが、自然の中の魔力にはいまだに気付けず、固有属性の能力も使い方がわからずについた俺にとつてこれは僥倖であつた。

「こちらが保存の能力に関する資料です

そつとひつひつ手渡してきた資料を俺は、そつそく読み始めた。

第9話 便利なものでも使えなかつたら意味ないよね

保存

ありとあらゆる物質・情報を魔法を発動した瞬間の状態で別空間に保存しておくことができる。

保存中は保存してしいる物質なら大きさと重さ、情報ならその情報量に比例して体内の魔力を消費していく。

物質を放出するときは、流体及び極小の物質以外の物質が無い場所で物理的に視認可能もしくは自身に接している場所にしか物質を出すことができない。

保存は自身の1m以内に一部分が含まれるのにしか発動することができず、放出も同様に1m以内にその物質のうちの一部が含まれることが条件となる。

情報の保存とは自身の発動しようとしている魔法の保存や記憶の保存があり、記憶は保存したからといって一時的に忘れるということではなく、自身の記憶としてとどまる。

保存中に体内の魔力がなくなつた場合、情報なら消滅するが記憶の場合は覚えている間なら再び保存できる、物質は強制的に近くの出現可能な空間に放出される。

保存可能な限界量は自身の魔力量によつて決まる。

「なあ、これあれば勉強すごい楽になるんじゃないか？」

「無理ですね、リューヤ様では記憶を保存するのは今の状態では不

可能かとおもいます

俺の提案は//リイによつて切り捨てられた

「なんですよー。」

俺は不満を露はせつつ尋ねる。

「たとえば、今リューヤ様がお持のペンですがそれを保存することは可能でしょう。そこにあるものをしまつことをイメージすればでしょから」

俺はその言葉を信じてペンをしまつところをイメージする。

するとペンは突如として手元から無くなった。

「おお、できた」

俺が喜んでいるとまたリイが口を開く。

「では今度はそれをどこかから出すことをイメージしてみてください

また言われて通りにするとリイは突然机の前にペンが表れて机の上に落ちた。

「なんだよ、簡単じゃないか」

「実際に行って分かつたと思いますが、固有属性に帰属する魔法はイメージするだけ使えます」

俺はミリィの話を聞きながら、ペンを出したり消したりして遊んでいる。

「では、記憶を保存する」とのイメージができますか?」

「へ?」

俺はその質問を受けてペンを落としてしまつ。

記憶を保存する?セーブ?でもそれだとイメージできないし……

「えーっと、ちょっと難しいかな?」

俺が苦笑いしながらそういう。

「それができなければ記憶の保存は不可能です、さうに行ってしまいます
えば今のリューヤ様では魔力不足が懸念されます」

「魔力不足?」

俺の言葉に、ミリィがうなずき口を開く。

「はい、魔力とは使えば使うほどその最大量は多くなり、回復速度
も速くなります」

俺はその説明を聞きながらうなずく

「しかし、今まで隆也様は魔力を使ったことがありません、故に今
のままでは記憶を保存できたとしても魔力切れを起こしてすぐに忘

れてしまこまか

ああ、なるほど俺が想像力^{えいし}に「うえに魔力が少ないから無理つてことか……

「無理じゃん……」

俺の驚きなど気にしないかのよう//、//ソイは淡々としゃべりだす。

「はい、だから無理だと申し上げました。魔力のほうは何かを保存したまま生活すれば自然と鍛えられますが、記憶の保存のほうは思考錯誤するしかありませんね」

「よしじゃあ、考えるから手伝ってくれ

俺がそうこうと//ソイが呆れたようにため息をつき口を開く。

「その時間があるなら勉強していく下さい、とりあえず今はそこのある本を保存して魔力を増やすほうだけでもやっておいてください」

「は、はい」

ちょっと怒ったような口調になった//ソイに「しおびえながら、俺は本を保存して勉強を再開した。

3時間後

突然、俺の頭上から本が降ってきた

「痛つて」

「どうやら魔力切れみたいですね」

その言葉を聞いて俺は納得したよと口を開く。

「さつきから無性にだるいのはやせいか

俺は頭をさすりながら、魔力切れのだるさに耐えつつ、勉強を再開する

「もう少ししたらもう一度その本を保存しておいてください

俺はその言葉に対して驚いたように口を開く。

「またやるのー?」

「今のリューヤ様の魔力は10歳の子供にも劣りますから、できるだけ鍛えておいたほうがいいかと」

俺つて10歳以下なんだと少し落ち込みながらも、俺は勉強を続けた。

それからの数日間の生活はとにかく保存しながら勉強をし、本を保存したまま食堂に行き、魔力切れで本がエリスの頭の上に落ちて思いきり脛を蹴られたり、寝ているときに魔力切れを起こして顔面に本が降つたりと、ろくなことのない日々だった。

7日後

「おー、とまあえずこれで世界史も終わつたな

そういうながら俺は伸びをする。

「では休憩にしましょ、紅茶を持つてまいります」

セツヒト一礼をしたミコイが部屋を後にします。

「ああ、たのむ」

俺はこの7日間眠る前に必ず記憶の保存の方法を考えてきた、そこで考えついたのが、覚えたことを頭の中のメモ帳に書いていくというイメージなのだが、いまだに成功した試しがない。いつも途中で、書くイメージに集中しきて書いた内容が変なものになってしまいます。

なにか、いいアイディアはないものか……

「リューヤ様、どうぞ」

俺は突然現れたミリイに驚く。

「おお、ミリイ戻つて來てきたのか」

「ノックをしたら返事がありましたので部屋の中に入ったのですが？」

「ああ、無意識のうちに返事しちゃつてたんだな

保存も無意識のうちにできるよになればいいんだけどな……

「この後はなんの教科やるんだ?」

俺は紅茶を飲みながら、尋ねる

「次は魔法学の勉強をしようかと」

「確かに、誰でも同じのが使えるのって、総体魔法だっけか？」

俺は以前聞いたこと思い出して尋ねる

「はい、そうですね」

「でもさ、なんでみんな同じのをつかうの？みんな自分が使いたい
ように魔法使えばいいんじゃない？」

「以前も話した通り総体魔法の発動に必要なのは、その本質の理解
とイメージ、さらに波長の同調です。

ここが問題となるのが本質の理解です、これは一般的にはとても理
解ができるようなものではありません」

「え、じゃあ誰も使えないじゃん！？」

俺はつい、身を乗り出す

「はい、ですからそれを言語化した詠唱、もしくは形としてあらわ
した魔方陣を用いるのが一般的です、故に既存の魔法を使う以外、
普通の人が魔法を使う方法がないのです」

「なるほどね、つまりはわからないうことを具体化したってことか

「そうゆうことです」

わからない事を具体化か……もしかして

俺は、突然ペンを持ち文章を日本語で書いていく。

「どうしたんですか？突然、わけのわからない記号を書きだして？」

「これは俺の住んでたところの言語だよ」

今まで俺は書くイメージもそれを頭にとどめるイメージもできていたでもそれができなかつたのは記憶するものがはつきりしていなかつたからだ、つまり実際に書きそれと並行してイメージし、そして書き終わつた時には、田の前に保存すべき記憶、頭の中には書いたとこつイメージあとはそれを合わせてとざめるだけ。

「できた…」

俺がそつそつぶやくと不思議そつそつコトが訊いてくる。

「何ができたんですか？」

「記憶の保存だよ」

ミコトは少し驚いた顔をしたがすぐにいつもの表情に戻り、口を開く

「おめでとうござります」

俺は喜びを隠せず笑顔でそれに答えた

「ありがとうございます」

その時俺が感じた達成感は、今までの人生の中でも特に大きなものであった。

今までの何もしていなかつた日々では味わえなかつた達成感、俺はその時少しごつちの世界にこれてよかつたと思えた。

第10話 ハローで大切だよね

記憶の保存に成功してから1日、いまだに俺は勉強を続けていた。

記憶が保存できるようになつたら、少しばかどるようになるかと思つていたが実際のところ、保存するためには一度記憶として確定な情報にしなければいけないので、たいてい変化は見られない。ついでに言つてしまえば、魔力が全く足りないから保存しても無駄である。結果として、俺は勉強から解放されることはなかつた。

「なあ、ミコイこの造形魔法でなんだ？」

「造形魔法ですか、これは総体魔法の一一種なのですが少し特殊で見て見せたほうが早いかもせんね」

そういうとミコイは、手のひらの上に火の玉を作つて見せたそれをふわふわと動かし始めた。

「おお、すげえ」

「今日は球体を作りましたがほかにも好きな形にすることができます

」

なるほど、便利なもんだな

しかしすぐに疑問が浮かびあがる

「あれ、でもこれがあればほかの魔法いらんんじゃない？」

「残念ながらこの魔法の殺傷能力はほかの総体魔法に比べて弱く、火ならば、ただの火を作りそれを自由に扱えるだけしかありません」

「ほかの魔法って、ただの火じゃないの？」

「はい、ほかの魔法は火に敵を燃やすなどの概念が含まれているために通常の火より強力になつております。造形魔法にもそのような概念を組み込むことはできますが非常に難しく、そのようなことをする人はあまりいませんね」

「そうか、じゃあ使えなくともいいんだな」

「いえ、これは総体魔法を使うに当たつて基本となる、波長の同調作業の練習として誰もが使うことができます」

「じゃあ、俺もそれつかえるようにならぬといけないのか」

「まずは大気中の魔力に気付けるようになつてからの話ですけどね」

「頑張ります……」

俺はその後も総体魔法の勉強を続け簡単な魔法の詠唱なども覚えたが肝心の魔力が感じられないでの、どうしようもない。

俺がその後もページを読み進めていくと魔石に関する説明が書いてあつた。

魔石

魔力を含み蓄えることができる石であり、物によつては魔力を注ぎ

込むことにより発火するものや水を生み出すものもあり、その用途は様々、現在は人工魔石も出回つており生活の基盤となつていてる。

「「IJの魔石つて、みんな使つてるんだよな？」

「はい、日常生活の中でも料理や明かりなどで用いられていますね、この部屋もすべて魔石によるものですし」

「でも、俺魔力なんて注ぎ込んでないけど勝手に明かり点べや？」

「魔石は空気中の魔力を吸収して自動的に魔力を補給しますので多少使う程度なら何の問題もありません」

「便利なもんなんだな、魔石つて」

はつきり言つて、明かりが点く仕組みは全く分からないし興味もないが、なんとなくすこいと思つた。

「あれ？ 空気中の魔力はなくならないの？」

「基本的にはなくなりませんね、生き物が体内で生成した魔力は少しづつ大気中に漏れていきますし、死んだときにも自然の中に取り込まれます。そのあと魔力がどのような経緯でほかの属性に変化するかはわかつておりませんが、そのおかげで自然の中から魔力がなくなるということはありませんね」

俺が自然の神秘に感動していると、ミコイが再び口をひらく

「ちなみに、そのことに関しては前のページに書いてあります」

「えつー!?

俺はあわててページをめぐると、確かにそのことについて詳しく書いてあった

俺は、あははとじまかすように笑つも、表情を一切変えないミロイ
からなんとなく怒氣のよつたものを感じた。

2日後

俺がいつものように勉強をしていると突然部屋の扉が開いた。

「リューヤ、今から街に買い物に行こうぜー。」

「グレイ、ノックしてくれつていつも言つてたんだる」

俺は無駄だと思いながらも注意してみる。

「おお、悪い」

そういうてなぜか部屋を出していくグレイ、俺は何事かと思つて首を
かしげる。

コンコンコン

「リューヤ、今から街に買い物に行こうぜー。」

「やり直しても遅えーよー。」

そういうて俺は近くにあった枕をグレイに向かつて投げつけむ、

グレイは難なくそれを受け止める

「まあ、気にするな」

そういうながらグレイが枕を投げ返してきたが、俺もそれを難なくキャッチする……顔面で

「それで街だつけ？」

「やうだよ、お前今まで一度もこの家出たことないだろ？」

確かに俺はここに来てからとこつもの一度もこのを出たことない、せいぜい庭の散歩程度である。

外に出てみたくないかと言われば外の世界も少し見てみたいが、今まで勉強に追われる日々でとてもそんな余裕がなかつた。

「ミコイ、今日の勉強つて……」

「いいですよ、数学がなくなつた分予定よりも早く進んでいますし たまには息抜きも必要かと」

「悪いな、明日は2倍頑張るから」

「グレイ様ではリューヤ様をお願いいたします」

そういうミコイはグレイに頭を下げる

「何言つてんだ？ お前もつてこないよ、俺とリューヤだけじゃつまんねえだろ？」

「まあ、気にするな」

「わたくしもですか？かしこまりました」

そういうて再び頭を下げるミリィを見てグレイは満足そうな顔をする。

「俺はライラたちも誘つてくるから後でもう一回迎えに来るな

そういうてグレイは嵐のじとく去つて行つた

そのあとグレイがまた部屋にやつてきたがエリスは訓練がありこれずライラも用事で出かけていたそうだ。

何はともあれ、俺達の買い物は始まつた。

俺の住んでいるレインさんの家はこの国の首都にある。

首都ソリュード

コーランド王国の首都ソリュードは巨大な港を有し、貿易・漁業の中心として栄えている、魔法学の発展に伴い、今は国内最大規模の魔法研究所が建てられ、魔法学の発展にも大きく貢献している。

人口は約100万人

最近、読んだ本に確かそんな説明が書かれていた。

この世界においては魔物の被害を防ぐためにこの規模の街には防壁が作られていおり、生活する範囲が限られているので、100万人と聞くと少ないようにも感じるがむしろ多いほうなのだろう。現に街を歩いていると多くの人で賑わっている。

「結構賑わってるんだな」

「当然だろ、首都だぜ」

「といひでど、行くんだ？」

「まず、飯でも食おうぜ」

俺もその案に賛成しグレイについていくがなんだか視線が気になる。グレイには好奇とも取れる視線が向けられているようだが、俺に向かられる視線はひとを邪険に扱つようなそんな雰囲気が感じ取れる。

俺の自意識過剰かもしないし気にせず歩くか。

そのまま、気にしないようにしながら歩いていくとグレイが一つの店の前で立ち止まつた。

「いりにじよつと思つたがいいか？」

「俺は何もわからんから任せせるよ

「私も大丈夫です」

「やうか、じゃあいるべ」

グレイが扉を開けて店に入ると鈴の音が鳴りそれに気づいた店員がこちらにやってくる

「お、グレイまた来たのか」

「 」以外じゃ落ち着いて飯食えないからな

「 」の店員は俺たちを個室の席へ案内してくれた。

その後メニューを解読するのがめんどくせこ俺はグレイに注文を任せ、ミソiyaはスープを頼みグレイは俺のと合わせてサンドイッチを2つ頼んだ。

すぐて食事は運ばれてきて、食事をしながら俺たちは会話をする。

「 ほかの店だと食事中にほかの客が 」のじりじり見るもんだから落ち着けないんだけど、 」の店は個室用意してくれるから周り気にしないで食えるんだよ、コーやも街中じり 」立つまつしな

「 あ、やつぱり俺見られてたんだ

「 なんだ自覚なかつたのか?」

「 こやそんな気はしてたんだナビ、 」のせいかと呟つてたよ

「 お前の髪と 」の色はあんまり好みでいないからな

「 」やつこつたグレイはなんとなく悲しきつだつた

「 」やつなのか?俺の住んでたといひ普通だナビ

そつて俺は黒い前髪をこじる

「それが普通つてホントにお前は変わったな奴だな」

「そう言いながら笑つグレイだがなんだかいつもと雰囲気が違つて見えた

「でもなんで、」の髪がいけないんだ?」

「それは、子供のこりに誰もが聞かされるおどき話が原因なんだよ」

第1-1話 本格的に剣と魔法っぽくなつてきた

むかしむかし、いの世界ができるよりも前の話です。

この世界ができるよりも前の世界では多くの人々が幸せに暮らしていました。

しかし、ある日突然現れた悪魔によつて人々の幸せは壊されてしましました。

悪魔は人々の幸せを壊してもまだ満足はせずに世界を壊していました。

それに怒つた神様は悪魔を倒し、新しい世界を作り上げましたそれが私たちの住むこの世界です。

「と、まあこんな感じの話なんだが」

「うん、よくあつそつた話だな、で今のぜいじ俺の髪と田の色が嫌われる理由があるんだ?」

今のは単なる勧善懲悪のストーリーとしか思えない。

「いの話に出てくる悪魔なんだが、それが黒い髪と瞳であつたっていうのが伝わつていてな、そこから黒い髪や瞳は嫌われる理由になつたわけだ」

「それって、本当かもわからないのにみんな信じてるの?」

「信じてる信じて無いは関係なく、ほとんどの人が心の隅で黒い髪と瞳は不幸を持つてくると思つてゐるな」

なるほど、俺はこの国じゃあ嫌われ者つてわけか……

「今までその風潮をただそうとした人はいなかつたのか？」

「もともと黒髪か黒い目の人間なんてめつたに生まれない上に、大抵は生まれたらすぐに捨てられて問題になる前に揉み消されちゃうのが多いからな」

被害が少なくてその被害もほとんど表に出てこないのならば、確かに問題となることは少ない、それじゃあ確かにただそつとする人がいても対処の使用がない。

「なあ、グレイ

「なんだ？」

「俺つて迷惑じゃないのか？」

一瞬グレイはあっけに取れた顔をしたが、次の瞬間には大爆笑をし始めた。

「なんだよ、俺はまじめにいつてんだぞ！？」

「ああ、悪い悪いあまりにも馬鹿なこと聞くもんだからつい

黒い髪や瞳が嫌われているのなら、それを預かつたレインさんたちにも迷惑がかかる、そう思つたのが馬鹿な考え方なのだろうか？

「迷惑だなんて思つてるわけないだろ、親父はそうゆうの氣にしないつて、それにそこの、えーっと名前なんて言つたけ？」

「//コイ・テイアスです」

「//コイのフルネームなんてそういえば初めて聞いたな。

「セツ、セツの//コイに聞いてみな、たぶん氣にしたこと無いわ」

「氣にしないの？」

俺は恐る恐る尋ねてみた。

「特に氣にしたことはありますんし、氣にある理由もあります」

その回答を聞いて俺はなんだか少しうれしくなった。

「まつたく、お前が気にしてちゃいまねだろ」

「ああそうだな、気にしないことあるよ」

そう言つて俺たちは食事を続け、次にどこに行くかとこつ話になつた。

正直な話、俺はこの街のことなど何も知らないので任せきりしかないのだが。

「どうあえずリコーやもんかん戦闘訓練だろ？」

そういえば以前そんなことを//コイが言つてこた氣がある。

「はい、魔法学の勉強が終わり次第戦闘訓練に入るつもりです」

「じゃあ、武器だな、いい店知ってるから次はそこに行こうと思つが

いいか？」

「でも、俺金ないぞ？」

「いんだよ、俺が買つてやるんだから

さすがにそれは悪いだろと思い、断りつとして口を開く。

「いややつめつけには…」

「大体そんなこと言つたらお前にこの支払いもできねえだろ？」

「あ、確かに何も気にせず食べてたけど俺つて、金持つてないんだよな。

「じゃあ、頼む…」

その後、グレイがミリィの分も払つとこいだし、ミリィは断つたが結局グレイが支払いをした。

店を出て俺はグレイについていくと次第に人数の少ないほうに進んでいき、気が付くと周りには誰もいない路地裏に入つていた。道を間違つてないかと聞いてもグレイは大丈夫というばかりで全く気にしている様子はない。

「なあ、やつぱりまちがつてないか？周りに店らしい場所なんてないぞ」

「だいじょうぶだつて、ほらついたぞ」

そう言つて立ち止まつたグレイの目の前にあるのは、ほらこ一軒家

でとても武器屋には見えないが、グレイが店に入つていったので俺もそれに続く。

「おひ、店長久しぶり」

「おお、グレイの坊ちゃん久しぶりだねー」

店長と呼ばれた人物は見た目は完全な老人で、髪はすべて白髪になつており眼鏡をかけていた。

その後もグレイは店長と世間話を続け俺とミコイは完全に蚊帳の外であった。

「ところでそこの人は誰だい？」

そつこつて店長は眼鏡を片手で支えて俺たちを見る。

「ああ、ここにいらっしゃるんとこは居候とその世話係で、リューヤとミコイだ」

それに続くよつて俺とミコイが自己紹介をする。

「ところで今日は何の用だい？まさか友達紹介して世間話しに来たわけじゃないだろ？」「？」

「ああ、そうだったリューヤの武器を買いに来たんだが何かいいのないか？」

グレイがそういうと老人は俺のことをしばらく見定めるように見ていたが、待つておれとだけ言って、部屋の奥のほうに行つてしまつた。

しばらくして老人が戻ってくるとその手には革製の鞘に入った全長80センチほどの剣であった。

「ちょっとユーローヤとやら、すこしこれを持ってみなセー

俺は、言われたとおりに持つてみると思つていて以上にその剣は重かつた。

鞘から抜いてみると、それは幅広な片刃の曲刀であった。

「ちょっと振つてみなセー

俺は言われたとおりに剣を振つてみる。

振つた感じに違和感はなく、思つたよりも使いやすかつた。

「うふ、よきそうだな、店長これくれ

「手入れ用の道具と合わせて、これくらこでどうだい?」

「いや、それはちょっと高くないか?」

その後も値段交渉を続けるグレイたちをよそに俺は、初めて持つた武器に興奮して素振りをする。

「お、買った

「まじめ

俺が素振りに夢中になっている間に交渉は終わり、剣は後で送つてもうつところになり俺たちは武器屋を後にした。

その後も俺たちはグレイの案内で街を回った。

2日後

「リューヤ様起きてくれ下さい」

「ん、おはよウ//コイ」

俺はいつも道理の朝を迎えた、違うところは今日から戦闘訓練が始まることくらいである。

朝食を終えて部屋に帰ってきて俺は//コイに尋ねる。

「それにしても、戦闘訓練でどんなことするんだ？」

「まずは自然の中にある魔力を感じられるようになつていただく」と、素振りといったところですね

「魔力って言われても、訥然としないんだよなあ

俺はいまだに自分の中の魔力以外を感じたことがない。

「体内的魔力は感じられていますよね？」

「そつち、なんとなくは分かるよ」

すでに違和感だとは感じないが、体の中にある魔力を感じることはできる。

「それと似たようなものを空気中に見出す、これができなければ基本的に魔法は使えませんから頑張つてください」

俺はそういうわれて、周りに意識を集中するが魔力など感じられなかつた。

「何も感じない……」

それから1時間ほどの時間をかけてみたが結局、魔力を感じることができなかつた。

「見つけれなら仕方ありませんね、今日はこれくらいにしておきましょう、では、次は素振りをしましょ」

そのあと俺はミリィに姿勢が悪いとか怒られながら剣をふるひ。何時間も剣を振つたせいで、寝るときにはすでに腕が筋肉痛になつていた。

第1-2話 夏は海派？山派？それとも自宅派？

あたりには木が生い茂り、目の前にはどこまでも続く坂道、そしてそこを苦しそうな顔一つせず歩いていくメイドとちびっ子、それに息を切らしながらついていく俺、情けないなんて思つてもらつちゃ困るこれでも頑張つてるほうだ。

「リューヤ様大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫だと思つ……」

実際のところはもう倒れるが、目の前を女一人が楽しそうに歩いているのに大丈夫じゃないとは言えない。

「情けない男だな」

エリスさん、ここは頑張つてるんだからそんなこと言わなくともいいんじゃないですか？

大体なぜおれがこの一人と登山をしているのか、それを説明するには昨日のことを話さなければならぬ。

訓練開始3日目

あれから毎日時間をとつて魔力を感知しようとするが、成果はなし。

「あー、わかんねえー」

今日も今日とて成果はなく、おれはうなりながら芝生の上に転がる。最近はよくある光景なのでミソiyaも特には気にしてないようだ。

芝生の上で唸つて いる俺の視界の隅に誰かが「ひらひら数いてくるのを見受けて、俺は上体を起こす。

「ほんにちほリューヤさん、ミリイさん」

「あれ、ライラどうしてここに?..」

ここは訓練用に俺が借りているスペースなので、ライラにどうしては特に用のない場所のはずだ、まあもあるとしたら俺かミリイに用がある程度だろうな。

「リューヤさんが魔力の感知ができずに苦労していると聞いたので、少し提案をと思って」

うん、ライラは本当にいい人だ、ビビのちびっ子なら来たとしても俺をあざ笑つて帰つていくだろうに、現にこのまえエリスが偶然ここを通りかかった時に鼻で笑われた。

「提案といつのは?..」

俺ではなくミリイが反応したが、どんな提案も俺にはどんな効果があるのか理解できないからこれが順当だ。

「魔力が感知できるようになるまで山の中で過る」ことはビビつかと思いまして」

ライラ曰く、人が生活し魔力を使うことで空気中の魔力の濃度が下がるので、人里離れた山奥に行けば魔力の濃度も濃く感知しやすいのではとのことである。

「確かに、今まま続けるよりも効果はありますね」

「はい、それで別荘の一つが山奥にありますのでそこに行かれではどうかと思いまして、すでにお父様の了承は得ております」

「この後も半ば俺は置いてけぼり状態で話は進み、次の日の朝に出発する」となったわけだ。

この時は俺も山での修行とこつ語感に少しづわくしていた。

次の日の朝田を覚まし俺とミコイの荷物を保存して家を出ると、なぜかエリスがそこにいた。

「なんでお前がいるんだ?」

「私も行くからに決まっているだら」

もう俺の口からはため息しか出なかつたが、ため息を3回くらいついたあたりで鳩尾に強烈な一撃を決められて今度はため息も出なくなつた。

ついでにエリスの荷物も俺が保存せられた。

そしてそれから約5時間ほど歩いて今に至るわけだ。

「ミコイちなみにあとどれくらいで着くんだ?」

「山を登り始めて2時間くらいですからあと3時間ちょっととこつたところでしょうか」

3時間か……ふう、死ねるな……

「一曰、昼食にしましょつか」

俺の様子を見て限界だと悟ったのかミリイが休憩を提案してくる、なんだか余計情けない気分になつたがここは渡りに船と思い賛成する。

「Hリスちゃんいいかな?」

「ミリイが言つならばしかたないな」

待て、今なんだか不思議なワードが聞こえたよつた。

「ミリイ、今Hリスのことなんてよんだ?」

「Hリスちゃんですが何かおかしかつたですか?」

「おい、Hリスなんで俺の時は怒つたのに今は怒らないんだよ」

「もともとやう呼ばれることは嫌いじゃない、ただ貴様に言わると虫睡が走るのでな」

簡単に言つと俺のことが嫌いなわけね、うんわかりやすい。それにしても、この二人仲いいな、いつのまにかミリイも敬語じやなくなつてるし……

そのあと昼食をとり、少し休んでから再び山を登り始める。

そこから一時間くらいは俺も元気だったのだが次第に疲れがたまり、

2時間後には談笑して前を行く一人をよそに黙々と歩き続ける。

さうして1時間ほど歩いたとき、遠くのほうに建物が見えてきた。

「ミリィ……あれが目的地か？」

「はい、もう少しですので頑張つてください」

俺は最後の力を振り絞り、歩いていきそしてついに家の扉の前に着いた。

「おう、遅かつたな

グレイがいた

「なんでお前がいるんだよ！？」

「ライラもいるぞ」

いや、まだなんでお前がもうここにいるんだよ、おかしいだろ！

ここまでは一本道だつたし追い抜かされたような記憶もない、まさか俺たちより早く家を出たのだろうか？

「そりゃあ、転移で来たに決まってるだろ?」

転移？

「あの、光つて移動するやつか？」

「ああ、それだ」

俺は膝から崩れ落ち地面に両手をついてうなだれる。

「ミツイさん… なんで俺たちが歩いてきたんですか？」

「足腰を鍛えるの」ぢやうどいいと思いまして、

ああ、そうですか

とりあえずその田はすぐ「休み」、次の田に備えた。

昨日早く寝たせいか、まだ日が出てこないうちに目が覚めてしまつた。

やる」ともないので、シャワーを浴び、ベッドに寝転んだところ、朝食の準備ができたといってミリィが迎えに来た。

俺は朝食を食べ終え自室に戻る途中で、今日の予定についてミコイに尋ねる。

「基本的にやることはいつも変わりません、まず魔力感知、それから剣の素振りですね」

「 もう ここ ひとつ もと 一緒に 」

「おお、今だれぬじとせじねぐらじしがあつませんし、魔力を感じ
られるよつになつたるせひ少し別のじとせやつてこじつと黙つてい
ます」

とりあえず、魔力を感知しろってことか。

昨日は疲れていたからか気づかなかつたが、なんとなく空氣中に手段は感じない何かがあるようなそんな気がする、これが魔力だとうのならば山に来た甲斐もあるだろう。

しかし、それから3日間、何かがあるような気はするものの、それをはつきりと認識はできていない。

「うーん、だめだな」

「そうですか、少し休憩にしましょー」

「なら、少し散歩にでも行つてくるよ」

「魔物が確認されたといつ情報もありませんし、少しくらくなら大丈夫でしょう」

俺はその言葉に安心して森の中へと入つていった。

森の中を歩きはじめて数分、木漏れ日を浴びながら俺は歩き続ける、耳には鳥の鳴き声と自分の足音だけが聞こえ、非常にリラックスできる時間を過ごしていった。

「いじつ風なゆつくりできる時間はいいもんだな」

自然と一人でちつてしまつ

「魔力みたいな何があるような気はするんだけど、どうもそれが

はつきりしないんだよなあー

そう言いながら空中で手を握る動作をしていた俺の耳に、今まで聞こえなかつた音が聞こえてきた。

第13話 ある一ひ、もりのなか

ガサツ

その音に驚き音の出でたほつを見つめていると草むらが揺れた。

ガサガサツ

俺は少し距離をとり、なおもその場所を注視する。

いつたいなんだ？何か危険な生き物じゃなければいいんだが……

俺の中に不安がよぎった瞬間、その生き物は姿を現した。

黒色の体毛が全身を覆い、その口からは牙が見え、手には鋭そうな爪を生やした生物、俺が知るその生物の名は……

その頃

コーヒーカップを片手にグレイ、ライラ、エリスは談笑をし、傍ではミロイがポツト片手に待機していた。

「それにしてもユーヤはビビこつたんだ？」

「森の中に散歩に行くと言つておりました

「うーん、そうか」

「何かいけなかつたでしょうか？」

「山、クマが出るって聞いたけど、たぶん大丈夫だ」

そう言われてミコヤは少し心配そうな顔をして森のまつを見つめた。

そんなことはつゆ知らず、俺はそのクマと対面していた、ただ、一いつななづみ田の前に出てきたそれは明らかに小さい。

「なんだ小熊か」

そつりぶやき、その場を立ち去ろうと振り返り、歩き出そつとしたときに背後から聞こえる動物の「うなり声」、普通に考えれば子供がいれば親がいる、当然今回も例外ではない。

再び後ろを見るとそこにはさつきの小熊とは比較にならないようなクマが2本足で立ちあがっていた、その全長は2メートルほどである。

お、落ち着け俺、あの熊は小熊を守るうとしているだけのはずだ、ななづみ田にしてもしてこなにはず。

4本の足で地を踏みしめ突撃をしてきた。

もうここまで来たら、落ち着いてなどいられない俺は背を向けて走り出す、依然聞いた話を元に山を下るまつに走る、そしてそれを追いかけて来るクマ。

こんなとこで死んでられるか、魔法さえ使えば倒せるだろうにな

んで俺は使えないんだよ。

魔力はそこいら中にあるはずなのにそれが見えてないだけで使えない、そのことが悔やまれる。

なんとか今は逃げていられるがいつ追いつかれるかもわからない。

俺は必至で魔力を感じようとすると。

一瞬、何かを感じる

その感覚は今まで感じたことのないものであった、そしてそれが魔力を感じることなど本能的に理解した。

さっきの感覚を頼りに集中する、息も切れ始めてきて追いつかれるのも時間の問題である。

魔力……魔力……魔力

そして再び、さっきの感覚がやつてくる。

「見つけた」

それは確かに口で説明できるようなものではなく、感覚の問題であるそこには魔力があるのがわかるそうとしか言えない。

俺は火の魔力を集めることをイメージし集め始める、そして俺はつぶやくように詠唱を始める。

詠唱の最後の一言を述べると同時に手をクマのほうに向けて立ち止

まる。

「敵を討ちしは火弾」

そして俺の手の中に集まつた火の魔力は……

拡散していった。

当然魔法は発動しない。

この時、俺は忘れていた。

魔力を自身の魔力と同調させなければ魔法は発動できない。

俺に突進してくるクマ

魔法が発動せずに立ち止まつている俺

俺はとっさに保存していた剣を手元に出し、それでクマの突進を防ぐ。

直接の衝撃は防げたがそれでも、俺は弾き飛ばされ地面を転がる。

俺を突き飛ばしたクマは俺の目の前まで来て立ち上がり、その両手を振り下ろす。

俺は横に転がりそれを何とかよけるがクマとの距離はいまだに近い、そのうえ俺はさつきの突進を受けて手がしごれている。

はつきり言つて絶望的な状況である、俺が保存していたのは今、手に持つている剣だけであり、今の俺に残された選択肢は勝つ見込みのない戦いをするか、誰かが助けに来るのを信じて逃げ続けるかの

どちらかである。

逃げても追いつかれるのはさつきの様子から確かだらう、しかも山を下りながら逃げているのだから誰かが来る可能性は下がっていく、なら……戦うしかないか。

「最近コイに叩き込まれた構えでクマに対峙する。

はつきり言って勝ち目はないが、このまま逃げて背後から一撃を食らって死ぬよりはましだ。

まずは手のしごれが取れるまでの時間を稼がないといけない、こんな状態では切りかかっても薄皮一枚裂いて終りである。

ある程度距離をとった俺に対してクマは一向に攻撃を仕掛けてこない、徐々に手のしごれも取れてもしかしたらこのまま逃げられるのではないかと思っていた矢先に、再びクマが突進してくる。

俺がそれをつけようとおもつて腰を落とすが、クマは俺から数歩手前で立ち止まり威嚇をしてくる。

そのあともクマはなかなか攻撃してくる気配を見せず、俺は徐々に距離をとっていく、そしてクマから10メートルほど距離をとったあたりで、再びクマが威嚇をしてきて何事かと思うと何とも残念なことに小熊が俺の後ろにいるではないか、俺は知らず知らずのうちにクマの逆鱗へと手を伸ばしていたようだ。

それに気が付いたときには時すでに遅し、俺を敵とみなしたクマは再び突進してくる、今度は手前で止まることもなくおれは必至で横に跳んでよける。

安堵するまもなくクマが突撃してくるのでそれをまたよける、クマを倒せる可能性があるとすればあの突進の瞬間だけだろう、すでに3回見て大体のタイミングは計れている、あとはそのタイミングに合わせて剣をふるう勇気と覚悟どれだけである。

魔法がつかえたらなどと周りに魔力を感じながら、ありえない可能性に思いをはせる、そんなことをしているうちに再びクマはこちらに向かって走つてくる。

まだだ、もう少し、今だ！

「うおおおおーー！」

俺は気合とともに剣を振り下ろす。

その剣はクマの突進の速度と相まって、クマの脳天に直撃しクマの頭蓋を碎く、それでも勢いの止まらないクマに俺に弾き飛ばされ俺は地面に打ち付けられる。

肺にダメージを受けせき込む、クマの様子を確認しようと思いついた。とか立ち上がると、クマは頭から血を流して動かなくなつていた。

これも生きるためだ、しようがない、俺は熊を殺したこと自身の中で肯定しながら屋敷を探して山の中を歩いていく。

それから十分ほど歩くと以前上った山道を見つけなんとか屋敷に帰れた、俺の様子を見て駆け寄つてくる人影を確認すると俺は安心から氣を失つた。

第14話 風邪で学校休んだ時とかつて暇だよね

俺が目を覚ますと、周りはこの別荘に来てから俺が使っている部屋であった。

俺が上体を起した時、部屋の扉が開く。

「フコイ、できればノックをしてくれるとうれしいかな」

「フコイ様、お目覚めになられていたのですか、申し訳ありません」

そういって頭を下げるフコイにたいして、逆に申し訳ないうつむきがしてくる。

「えっと、そんなに気にしないから頭上げてくれ

俺がそういってやつとやつとフコイは頭を上げてくれるが、まだ何か言い足りないといった表情をあてている。

無理に聞き出しても、やくなことはないから向いつが話す気になるのを待つか。

「どうあえずいくつか聞きたいことがあるけど大丈夫かな？」

「はい、私がお教えできることなり」

そのあと俺は、ここに誰が運んでくれたのかや、なぜ怪我が治つてゐるのか、俺はどうぐら寝ていたのかなどを訪ねた。

それに対する答へは、まことに運んだのはトトロで散歩に行つて帰つてこない俺を心配して探していところ、体中にいくつも小さな傷を作つた状態でふらふらと歩いている俺を見つけて駆け寄つたところで俺は氣を失つたらしー。

おそれく、小さな傷などは氣づかぬうちに氣か何かに引っ掛けできていたのだろう。

怪我は肋骨や腕の骨が折れていたそうだが、エリスが直してくれたそうだが、なぜエリスなのかはわからない、とりあえず後で礼を言つておこうと思つ。

俺が氣を失つていた期間は約1日ほどだつたらしー。

俺もクマに襲われて、山の中を駆け回つたことを話す。

「そつか、とこひで氣を失つていた間の看病はトトロが？」

「はい」

服を着替えているがまさかこれまでトトロがやつたのだろうか、であることなら違つて欲しいが、怖くて本当のこと我が聞けない。

そんなくだらないことを俺が悩んでいる、トトロが口を開く。

「申し訳ありませんでした

そつこいつトトロが頭を下げる。

俺は突然のことに困惑してしまった。

「え？ な、何？ なにかしたの？」

「今回のことは私が山の危険度を見誤ったことが原因です」

その声色からは自身を戒め後悔しているような悲痛な雰囲気が感じられる。

「ほら、でも俺はこうして生きてるわけだし」

「魔法がつかえないリューイヤ様が生きて帰つてこられたのは奇跡です……」

そういひながらリコイはつづむく、その様子を見て俺は口を開く
「奇跡でもなんでもいいじゃん」

イの前に突き出して制す。

「今、俺は何の問題もなく生きてるんだから、次から気を付ければいい話だろ？」
この話はもう終わりでいいよ」

我ながら少し人好しな気もするが、実際謝られたといひで俺には何の得もないのだからこれでいいのだろう。

「わかりました、次回からは気を付けます」

そう言ひて、部屋を後にしてゆく。「イヤだぞ」声をかける

「あ、ちょっと待ってくれ」

「なんでしょうか？」

「いや、腹が減つて……」

腹をさすりながら俺は苦笑いをする

「では、何か軽く食べられるものを持つてきますから、そこで安静にしてください」

そういつてミリィは部屋を後にする、それから数分後扉が開きミリィが来たのかと思いそちらのまつを見ると、そこにほグレイがいた。

「お、気が付いたつて聞いたから、ちょっと顔出しきたぜ」

「できればノックしてくれるとありがたかったけどな

そんなこつものやつ取りに安心したのか、グレイはベッドの脇に椅子を持ってきて座った。

それからグレイとビリーワークしたのかなどを聞かれ、俺は話を少し大袈裟にしながら話してやつた。

「それであんな怪我してたのか

怪我のことを言われてふと思いつく。

「そういえば、エリスが怪我治してくれたって聞いたけど、なんでエリスだったんだ？」

「ああ、エリスの属性は回復だからな、今回のリューヤの怪我は結構ひどかつたからなエリスに頼むのが一番だったんだよ」

なるほど、あいつの属性そんなのだったのか。

そんな話をしているとミコイがサンダウイッチを持ってきてくれ、俺はそれを軽く平らげた

「そういえば俺、魔力感知できるようになつたぞ」

「マジで…？」

グレイは驚きを言葉にして、皿を片付けに部屋を出ようとしたらミコイは振り返りる。

俺は証明のために火の魔力を手に集めてみせる。

「なるほど、確かに集まっていますね。それでは、次からは同調の練習に移りましょう」

「じゃあ、今すぐ準備するよ」

そういつてベッドから出ようとすると、俺はミコイに肩をつかまれる

「今日はやめておきましょう、まだ体力が回復していないでしょ？」

「し

俺はそれに対しても反論をしてみるも、「」と「」とく断られ結局、その日は訓練を認められずベッドの中で過ごした。

次の日の朝

俺はミリイに起しそれ朝食をとりに食堂に向かつ
俺はすでにいた3人にあいさつを済ませ席に着き、俺の隣ですでに
食事を開始していたエリスに声をかける

「俺の怪我エリスが治してくれたんだろう？ ありがとな」

それに対しても瞬視線をこちらに向かたが、すぐに視線を元に戻す
「気にするな当然のこととしたままでだ」

相変わらず可愛いのない奴だな、などと思つてみると世話になつた
し、それに後が怖いので黙つておひつと思つ。

そのあと食事を終えた俺はミリイとともに庭に出た。

「よし、じゃあ魔力の同調のやり方教えてくれ

「では、魔力を集めてください」

俺はうなずき、右手に火の魔力を集める。

「その状態のまま体内の魔力を左手に出してください」

俺は言われたとおりにし、両手に別々の魔力を持つ。

「次はどうするんだ？」

「その二つの魔力を重ねるようにしてみてください」

「俺は右手と左手の平を近づけて行き魔力を重ねあわせようとするが、なかなか重ならない」

「あれ、上手くいかないぞ？」

「もう少し待っていてください」

「言われた通り、待っていると徐々に魔力は合わせり一つになつた。

「おお、これが同調か」

「はい、これは自然界に存在する魔力がほかの魔力と波長を合わせようとする性質を利用した方法です」

「でも、今のじゃ時間かかりすぎじゃないか？」

「そうですね、リューヤ様は火の魔力とは相性が良くないみたいですね。とりあえず別の属性も試してみましょう」

「リューヤ様は、水との相性が一番良いみたいですね、風もなかなか早いほうですが、ほかの二つはかなり遅いですね、土のほうがまだ火よりは早かつたですが、戦闘中に使うには少し厳しいところがあるかと」

「じゃあ、俺は火と土は戦闘中は使えないってことか？」

「魔力の性質を使わずに波長を変化させれば可能ですが、魔力に慣れていない今のリューヤ様には厳しいですね」

「出来ないものはしょうがないか、それでこれからは何の練習をすればいいんだ?」

「今の魔力の同調を片手で行えるようになつていただきます」

「そんなの簡単だろ、右手に水の魔力を集めて右手から魔力を……」

「そういうて魔力を右手から出そつとした瞬間に水の魔力が拡散していく。」

「あれ?」

「今やつていただいてわかつていただけたかと思いますが、魔力を片手に集めながら放出するという全く逆の概念を持った行動をするのでどちらかが疎かになると失敗してしまいます」

なるほど、じゃあ右手に魔力を出してから水の魔力を集めれば……あれ、水の魔力が集まつてこない

「その方法では魔力を集めようとしても魔力が反発しあい集めることができません」

「集めてから魔力を出しても反発するんじゃないのか?」

「反発はしますが集めるのと違い、すでに手中にあるので片手につの魔力を保持することが可能です」

つまり、それしか方法はないってことか。

「では、練習を始めましょう」

第15話 べ、別に負けたって気にしない

「おし、できた」

俺の右手には同調に成功した水の魔力を納まっている。

同調の訓練を始めて一田畠、なんとか5回に1回くらいは成功するようになってきたが、それは魔力だけに集中すればのこと、最終目標は戦闘中に使えるようになることなので、他のことをしながらも100%成功するようにならなければ意味がないということなので、まだまだ道のりは長い。

「今日はこれくらいにしておきましょう、剣のほうも練習しないといけませんし」

「了解」

そう言って俺は魔力を霧散させ、代わりに右手に剣を出す。

「大体の基本の形は教えましたので、今日からは組手形式の練習をしたいと思います」

「組手って、もしかしてミリィと？」

ほかに相手が思い浮かばなかつたので、俺はそう尋ねる

「はい、そうですが？ 何か問題でもありましたでしょうか？」

いかにも問題なさ砂霧田氣で言い放つミリィ、しかし俺からしたら

十分に問題である

「いや、流石に女性に切りかかるのは気が引けるところかな?といふか……」

もし怪我をさせてしまつたらといつ不安から俺はロボもる

「安心してください」

次の瞬間に俺の視界が回転し気が付けば天を仰いでいた。

俺は、一瞬何が起つたかわからなかつたが、ミリィに足払いを食らつてこけさせられたことに気付く。

「組手といつてもリュ・ヤ様は私に一太刀も入れることはできないので」安心ください

そつと笑顔で俺に答え、手を伸ばしてくる

俺はミリィの手を借り立ち上がりながら、安心よりも情けなさに襲われた。

これまで数日間訓練を重ねて、クマも倒せたこともあって多少は強くなつた氣でいたが、どうやらこの世界では熊殺しは何の自慢にもならぬらしい。

俺はそのあとミリィ相手に組手をするも一太刀も入れれないビームか圧倒的すぎる力の差に愕然とするばかりだった。

それから三日後

俺は片手での同調もすでにこなせるようになつており、今は組手中に魔法を使えるようになることを目標に練習を続けているが、成功回数は今までで一度だけでとても戦闘中に使えるような状態ではなかつた。

「魔力ばかりに集中していますと、攻撃を受けてしまいますよ」

俺が同調に集中している隙をついてミリィが足払いをしてくる。

いくつも手加減をされているからと云つて魔力に集中していた俺は避けることができずに転ばせられる。

「一度は成功したんですから頑張ればできますよ」

そう言つて励ましながら手を貸してくれるミリィ。

実際のところ1回成功したといつても打つ方向を間違えて外しているので成功と呼べるか怪しい

「じゃあ、もう一回頼むわ」

そつ言つてミリィと、ある程度の距離をとる。

「ではこままで」

その声と同時にミリィは駆け出し俺は剣を持って構えながら同調を開始する。

俺はミリィが間合いに入る瞬間を見計らい剣を横に薙ぐ、それをミリィは姿勢を低くして回避しそのまま足払いを繰り出してくる。

俺はジャンプして避けそのまま空中で蹴りを繰り出すが、ミコイは後ろに下がりよける。

そして珍しく今回は魔力の同調に成功した俺は詠唱を開始しながらミコイと距離をとる。

「逃がしませんよ」

そう言って駆け出すミコイに對して俺も前方に駆け出す。

あと数秒で間合いに入るといった距離に来た時に俺は剣を再び横に薙ぐ

「その距離では当たりますよ」

そう言って蹴りを繰り出そうとするミコイ、それに対しても俺は剣を切り返す。

切り返しに気付いたミコイは蹴りを中断してすれすれで剣を回避する。

そして俺の詠唱は完了する。

「敵を穿つは水弾」

その一言とともに俺の左手から水の弾が放たれる、距離は1mもない、一瞬がをさせてしまうのではという不安がよぎるが、水弾はミコイの手前20cmほどで弾け飛んだ。

「よかつた

怪我をさせずに済んだと安心した瞬間に、ミコイの蹴りが脇腹に入る。

「ぐふつ

そのまま俺は脇腹を抱えてうずくまる。

「あ、すみません、なかなかいい動きだつたものでつい強めに蹴つてしましました」

ミコイは少しあわてながらかがみこみ俺の様子を伺つ

「だ、大丈夫だ」

俺はそう言ったが明らかに無理をしているのはバレバレだろつ。

「少し休みましょうか」

そう言つてミコイは苦笑いをする

少し休みダメージも抜けてきたころに俺はミコイに疑問を投げかける。

「さつき俺が魔法撃つた時なんで途中で消えたんだ？」

まさか同調が不完全だつたとかそんなのでは困るので聞いてみた

「あれは私が弾いたんですよ」

「え、でもそんな素振りはなつかただろ?」

その質問を受けてミリィは右手の上に水の玉を作り出す
「確かに私は先ほど魔法もしていなければ触れてもいません、しかし」

「アリィーが左手を軽く振ると水の玉が先ほどのように弾けた。

「武器を使いました」

「アリィーの武器を知らないな、などと思いつつ尋ねる

「アリィーの武器ってなんだ?」

「私の武器はこれです」

「アリィーが袖をまくつて腕輪を見せてくる

「その腕輪は?」

まだ理解できない俺はさりに尋ねる

「これは魔力を糸状にした魔力糸といつものを出す」とのできる魔道具で作り出した魔力糸は自由に扱えてさりにかなりの強度があります

それが何なのかは分かつたがそれだけではまだ足りない。

「でもそれだけじゃさつきみたいに水を弾くのは難しいんじゃ？」

「はい、ですが私は固有属性の能力でそれを可能にしています」

「ちなみにミリイの属性は？」

俺は期待を胸にさう尋ねた

「私の属性は音です」

「音？」

俺が訊き返したのに対し、ミリイはうなずき口を開く

「はい、私の場合は作り出した魔力糸を音の振動により高速振動させることにより攻撃、防御に使用します。この道具は一つで最大20本までの魔力糸を作成できるので両手で40本の魔力糸を作成できるので便利なんですよ」

「なるほど、便利なもんだな」

「はい、ですが魔力の消費が激しいのであまり使いたくないのが本音です」

俺が感心していると、ミリイがそろそろ再開しようかと提案してきたので俺は再び組手を開始する、この日はそのあと何度も魔法を発動させられたが、結局俺が地べたに転るという結果は変わらなかつた。

次の日

「魔力の扱いも多少慣れてきたようですが、次の段階に入りましょうか」

組手の休憩中にミリィがそんなことをいい出した

俺はタオルで汗を拭きながらそれを聞き小首をかしげる
「次の段階ってなんだ？」

「次の段階では肉体強化を覚えていただきます」

第16話 頑張ればきっと報われる

「強化魔法?」

「俺はどこかで聞いたことがあるような気がするが思い出せずに小首をかしげる。

その様子を見て呆れたよう//コイが口を開く。

「もう忘れたんですか、この前勉強した中にあつたと思いますが自身の魔力だけで使用できる特例の総体魔法です」

そう言われてこの前勉強した中にそんなのがあつたなどと思い出す。

「確かに、魔力で肉体を補強するとかってやつだっけ?」

俺がそうこうと//コイはうなずく

「おおむねはそのような感じですね。この魔法は体内で魔力を解放し、その魔力の持つ力を肉体の力に反映させるといったものです」

その説明を受け俺は疑問を持った

「聞く限りは簡単そうだが、なんで今までやらなかつたんだ?」

「確かに口で言つのは簡単ですが、實際に行つには体内に魔力を收め続けられるだけの制御能力が必要です」

俺はその説明を受けて納得した、今は多少の魔力を手のひらの上に留めておくだけでいいが、体中となればその魔力量は膨大になり当然制御することとも難しくなる。

「つまり、練習あるのみってことだな」

「はい、そういうことです」

俺は早速体中に魔力を巡らせていく。

俺が意外と楽だなどと思つているとミリィが口を開く。
「リューヤ様そんなに魔力を垂れ流して何故そんな自信ありげな顔ができるのですか？」

俺はその言葉を聞いて驚いた、確かに魔力は体の中に感じるが魔力の供給をやめると減つて行くのがわかる。

「あれ、これって俺が思つてたよりきついかも」

ミリィがため息をつく。

「そんな簡単にできるのならば始めから練習させてますよ」

なるほど、それもそうだな。

その後も俺は肉体強化の練習を続けるが途中で魔力切れになつてもようも早く訓練を切り上げる。

俺が部屋に戻るとしているどこから掛け声のようなものが聞こえてくる。

俺は声のする方へ行つてみるとそこでエリスとグレイが組手をしていた。

エリスは自分の背丈ほどもある細身の剣を振るが、そのすべてをグレイは躱していく。

「ほらどうしたエリス、そんなんじゃ俺には当たらぬぞ」

エリスはグレイに挑発され剣速を上げるが、レイは涼しい顔でそれを躱してゆき隙をついて背後に回る。

「ほら背後とられたらダメだろ?」

「予想の範囲内です」

そう言い終わるよつも早くエリスは剣を回し逆手に持ち替えたかと思つと自分の脇から後ろに向かつて剣を突き出す。

しかし、グレイは自分に向かつて迫つてくる剣を見ても涼しい顔のままでいる。

「悪くはないけど、少し甘いな

そつ言いながら体を半身にし避けると同時にエリスの首筋に手刀を添える。

ちなみに今のは、ほんの数秒の間の出来事であり俺から見たら全く何が起こったのかわからなかつた。

「はい、これでまた俺の勝ち」

そう言いながら笑うグレイに、不満げな顔になるエリス

「兄上に勝てるわけがないではありますんか」

「まだ兄貴として負ける訳にはいかないからな

そうグレイが言つてミコイは余計にむくれる

「といひで、リュ・ヤはいつまでそこで固まつてるんだ?」

「いや、俺にはついていくような次元の戦闘じゃなかつたからな、
ただただ見とれてただけだよ」

俺が肩をすくめながらそう話すと、不機嫌なエリスが毒を吐く。

「貴様が付いていく次元の戦いであったならば、練習にはならな
いではないか

全くを持つてその通りだが、こじだただただ言われるだけなのも性に
合わない

「そういうお前も、まるでグレイの練習相手にはなつてなかつたみ
たいだがな」

正直いって、大人げなかつたとは思つてない。

俺とエリスは睨み合つ

「ならば私が稽古をつけてやるつか？」

エリスが高压的な姿勢でそり立ってくる、下からなにに高压的とは言ひえて妙な話である。

「お、お前と俺が戦うつてのか？」

確かに今俺は魔力切れで手に剣も持つてないが、先ほどの様子を見たかぎり勝てる見込みなどありはしない。

「そうだ、私が貴様に直接剣技というものをたたきこんでやる、強化はせずに戦つてやるから安心しや」

今にも切りかかっておれつなほどの威迫を出しながらエリスは不敵な笑みを浮かべる。

その様子を見て俺は顔から恐怖の色を消して、一度は言つてみたい名言を吐く

「だが断る」

その言葉を聞いた瞬間にエリスの眉間にしわがより、青筋が浮かび上がる。

「ならば無残に斬られるがいい！…」

そつ言つてエリスは剣を振りかぶる。

俺は言いたい」とは言つた死んでも悔いは……残るみなやつぱり。

俺がさつきの発言を悔いるも、なかなか剣は振り下ろされない、それもそのままであるエリスの後ろでグレイが剣を両手で挟んで抑えているのだから。

「エリス、リューヤを斬っちゃダメだろ」

「まあで諭すよ」^{アドバイス}グレイ。

グレイに諭されて少し落ち着いたのかさつきまでの気迫が弱まっていくのがわかる

「申し訳ありません、少し感情的になりました」

少し気まずさ^{アヒート}エリスがそうこうと、グレイがこちらを向く

「リューヤもあんまりエリスを怒らせるなよ。まあ、エリスなら斬つても大抵の怪我ならすぐ治せるから問題ないっていえばないような気もするけど」

いや、問題あるだろ、それだと俺が痛い思いするし。

俺は身の危険を感じとりあえずエリスに謝るが睨まれ、そそくかと逃げるようになにその場を後にした。

それにして俺が訓練してる間にあいつらも訓練してたんだな、などと思いながら自室に戻る。

俺はシャワーで汗を流し、せっかく時間もあるので勉強の復習を開始する。

俺は一体いつからこんな真面目君になってしまったのだろうか？

それから数日は徐々に上手くなつていったが強化をすると必ず魔力を浪費し、魔力切れを起こして訓練は終了、そのあとは勉強の復習といった生活を繰り返した。

「強化もだいぶ上手になりましたね」

今の俺の体からは魔力は漏れ出していない、しかしここから体を動かすと集中力が足りないのか魔力を抑えることができなくなってしまう。

「でも、動けないんじゃ強化した意味ないだろ」

「ここまで来ればもう少しですよ」

確かに少しだろうがそのもう少しがきつい、確かに体が軽く感じ動きもかなり良くなっているが、ずっと魔力に集中している分精神を摩耗していく。

「こんな状態で戦えるのかよ」

俺はつい愚痴をこぼす

「慣れればなんてことはないですよ、むしろ慣れてください、そうでなければ戦えません」

この世界に来て、俺の持つ魔法というものに對して考えは大きく変わった、まさか魔法がこんな血のにじむような努力の上に成り立つているなどとは考えたこともなかつた。

それからも俺は訓練を続け試験が来週に迫つた口になつてようやく強化を使いこなせるよつになつた、今の俺からしてみれば同調など朝飯前である。

まあ、これも単に毎日訓練に付き合つてくれたミリィのおかげであろう。

俺は強化を使いこなせるよつになつた日に山から下り試験に備えた。

第17話 テストで敗北したときの心がかり

俺が正座してこらの田の前で、ニコイがため息をつく。
「呆れて言葉も出ませんよ、こいつが今まで何をやっていたんです
か？」

何と言われば勉強や訓練などいろいろやっていたが、今、口を開いたら殺されると思い、黙つたまま下床を見つめる。

「まつたく、あんな簡単な問題ばかりなのにこの点数……」

なんとか、反論しようと思つて俺は口を開く

「数学は満点じゃないか……」

それでも//コイの気迫に押されて徐々に声が小さくなつていく。

「ええ、うつですね私が教えていない数学、『だけ』はよかったです
いですね」

よほど自分が頑張つて教えたことを俺が生かせなかつたのか、わざ
わざからこんな調子で俺は説教を受けている。

俺が試験の時、どんな感じだったかといつと

「はい、始めて」

やる気のない感じで試験官の中年男性が灰色のズボンを頭を搔きな

がら開始の合図をする。

俺はその合図とともに、1教科目の歴史のテストに臨む、もともと理系の俺に歴史をやらせるのも問題だが、全く知らない世界の歴史の問題を解けというのだ余計にたちが悪い。

出来はなんとかなったかなといったところだった。

2教科目の言語学にしても同じようなものだった。

3教科目の数学はつきり言つてこいつは楽勝、いつたいこの世界の科学はどこで止まっているのだろうか？

4教科目魔法学、魔法というものに今まで触れたことがない割には頑張つたと思う、うん頑張つたそう思いたい。

さて問題の実技試験、つまり戦闘だ。

俺は試験官につれられ、校庭に移動する。

校庭にはぽつんと人形が置かれていた。
人形といつても、魔道具の一つで魔力を注ぎ込んだ者の命令に従い動くものである。

「お前の相手はあれだ」

はつきり言つて人形があいてなのは都合がいい、人形は動きと頑丈さは人間のそれを超えるが魔法を使うことができない、しかも肉体強化さえ使えば大抵は人のほうが動きはいい。

これなら勝てると思つていると、試験官が説明を始める。

「今回の試験はあくまで実力を測るためのものだ、ただ勝てばいいつてもんじやないからな。」

そういうて試験官が人形に魔力を注ぎ込むと、人形は立ち上がる。

俺も肉体教科を施し、剣を出し構える。

そして試験官の開始の合図で俺は人形に向かつて走り出す、しかし人形はその場から動かない。

俺は、そんなことは気にせずに切りかかるが人形は一太刀目を避ける、二太刀、三太刀目も同様に避けられる、そこで俺は気が付く。

この人形、避けることだけを命令されている

人形から攻撃してこないのならば俺の負けはない、しかし俺の攻撃も上手くはない、つまり、どうやって倒すのかを見て実力を判断するということだろう。

俺の使える技はせいぜい風と水の初級呪文と拙い剣技程度である、これでどうやって倒すか。

正直な話、水と風の属性は火や土に比べて威力が弱く決定打にはなりえない、やはり魔法を牽制に使い隙をついて剣でどごめを刺すしかない。

俺は再度人形に切りかかる、人形はやはりそれを楽に避ける、しかし今回はこれだけでは終わらない。

「敵を弾きしは風弾」

風属性の魔法は確かに威力は弱いが速度はある故に牽制には向いてる、一度攻撃を避けて体制の整っていないところにこの魔法が当たれば体勢を崩せる。

予想どおり人形は風弾を避けきれずに体勢を崩す、俺は体勢を崩した人形に向かい剣をふるうが、人形は回避を試み、そのせいで俺の剣はかする程度のどどまり、再度距離をとられる。

風でダメなら、次は水か？

いや、風でもかすった程度なら水では当たりもしない可能性が高い、ならあれを試してみるしかないか……

ここ1週間で練習してきて、まだ完全ではないにしても形はできている。

俺は成功することを祈り人形に向けて走り出し袈裟切りを繰り出す、当然のようにそれを避けた人形に向けて風弾を撃ち体勢を崩す、ここまでは先ほどと何も変わらない。

俺は右手に持つ剣を袈裟切りし終わつた体制から切り返す、当然先ほどのように人形は無理やり回避をししさらに体制を崩す、しかし今度は剣がかることはなかつた、すでに俺の右手には剣はなく、代わりに左手に剣を握りしめており、俺は人形の首めがけて剣をふるつ。

当然そのあと繰り出される左手の斬撃を避けることはできず人形の首が飛び動かなくなる。

「はいここまで、おつかれさん」

その様子を見て試験官が終了を告げる。

結果は後日グラント家の屋敷に送ると言われ俺は付き添いについできていたミリィとともに屋敷へと帰った。

以上が試験の様子だ。

まあ、これで分かってもらえただろうが、筆記試験は数学以外壊滅的状況だった。

そんなことは一言も言つてないって？

出来が良かったと思ったとき以外ははたいてい壊滅と相場は決まつている、よかつたと思っていても壊滅状態な時もあるが。

とりあえず、少しでもミリィの機嫌をよくするために何か言い訳をしなければ。

「あ、でも実技のほうでは最後に練習してたあれ出来たよ」

「保存を利用した武器の持ち替えのことですか？あんなのはできて当然だと思っていましたが

「や、そうだよな」

今のミリィにとつては焼け石に水だつたようだな、普段なら多少の賛辞をおくれるとこりだつた。

筆記科目の復習はしたつて言いながら隠れてその練習ばっかりしてたせいで、筆記試験のほうは散々だったんだけどね

「まつたく、『おつせり』合格できたからこよくなもの、もしできていなかつたら」

「うん、そなんだよ受かつてるんだよ俺、たぶん数学が満点だつたから他をカバーできたからだナビ受かつちやつてるんだよ。なのにこんなに怒られるのつておかしくないか？」

37日間で大学受験の勉強、最初から初めて受かつたようなもんだよこれ？

まあ、受かつたつてだけでほほ奇跡なこのひのメイドさんは不満たつふりみたいでもううひつてんだよ。

「聞こてるんですか？」

「は、はー」

うん、黙つて正座しておこなう、いい加減足しづれてきたナビ今は黙つて怒られるしかなこよ。だつて……わつき部屋に突撃してきたグレイが一瞬顔を引きつらせんへじこは怖いんだよ。

あつとミコイは教育ママになるんだらうなー、などと考えつつ正座し続けること約1時間、俺はやつとのことで解放され今後ミコイの「こは怒らせなこよひこつなどと誓こつてくつべ。

ちなみに、そんな誓いは次の日には忘れていた」とは言つてもない。

第1-8話 引越しの時の段ボールって邪魔だよね

「それにしても試験の時もそうだが、学校まで遠すぎないか？」

今、現在俺は学校のある街へと向かう車の中にいる。

車と行つても俺の元いた世界のものとは違い、風の魔石により車体を浮かせての移動をするものであり、揺れの面でいえば自動車よりも優秀だろう。

「しょうがないですよ、王立学園には王都だけでなくほかの街や村からも人が集まるので私たちがいくリブヤタンが北西、ベヘモットが北東から南東の一部、南東および南西の一部の者はジズに通うことになりますからどの場所からもいきやすいところに作るしかないんです。」

魔物がはびこるこの世界においては戦えないことは死を意味するらしく、義務教育期間は12年で学費は無料の全寮制らしく夏休み、冬休み、春休み以外はその学園を中心として形成された都市で生活するらしい。

「それにしても、転移つてどこでも使えるわけじゃないんだな」

「はい、これから行く学園では王都の中心部と同様に転移で入り込むことが禁止されております」

まあ、実際問題そんな簡単に入り込めるようにしていたら危険すぎてたまらないもんな。

そんなことを考えながら窓の外で流れていく自然豊かな景色を眺める。

街は基本的に城壁で囲まれており、一歩その外に出ればす自然豊かな地形が広がっており、まるで城壁の中と外とでは別の世界のようである。

車に乗つて移動すること約1時間、目的地となるリブヤタン王立学園を中心とする街が見えてきた、その規模は王都ほどではないがおそらくこの世界では大きいほうであろう。

俺は街の中の様子を眺めながら、車に乗つていると校門の前に着いたようであり、車は停止する。

「相変わらずでかいな、この学校は」

そう言いながら俺は車を降りて学校を見上げる。

「まあ、この敷地内に全部で16の寮と初等部、中等部、高等部の校舎がありますからね、それなりの敷地面積は必要ですよ」

ちなみに、この国では初等部、中等部、高等部はすべて6年制らしく、歳からいえば俺は高等部一年。

俺とミリイが今日ここに来たのは編入の手続きのためである、寮の入居だのなんだのめんどくさいのがあってそのためには本人が直接学校に来ないといけないらしい、全くを持つて迷惑な話だ。

俺はそのあと事務室のような場所で学生証や学生服などいろいろと渡され、ハンコ代わりになんかよくわからない紙に魔力を注ぐ。

そして、16号棟が俺の入る寮だということを告げられ俺とミコイはその寮に向かう。

寮につき、管理人室にいたおばさんに部屋番号を聞き俺は部屋へと向かう。

「えーと、ここか」

俺は自分の部屋を見つけ鍵を使い扉を開く、まさかのタッチ式カードキーだったことには驚いた。

「リューヤ様、では私は自分の部屋に参りますので」

「ああ、荷物俺があずかってるんだったな、部屋まで運ばなくていいのか?」

「はい、大丈夫です」

実は、俺の世話係としてミリィもこの学園に編入することになつている。

別に一人でも問題はなかつたのだが、知り合いがいるに越したことはないので快諾した。

俺は保存していたミリィのカバンを出しミコイに手渡す。

「では、後程お迎えに上がります」

「ああ、またあとで」

まだ、こつちで色々と置つておかないといけないものがあるひしく部屋に荷物をおいたら街に買い物に行くことになつてこむ。

俺はミリイに別れを告げた後に部屋の中に入る、部屋の間取りは1DKといったところだらうか、それなりに広く収納スペースも多い。

この寮は食事が付いていないため、寮の食堂で金を払つて食べるか、自炊するのが基本である。

まあ、俺は料理はそこそこできるので自炊しようかと考えてゐる。とりあえず、このなにもない部屋では何もできないので荷物を出して、床に座りミリイを待つ。

そのあと、ミリイが迎えに来て買い物に行き、家具や料理器具、その他もうもうを買い部屋へと帰つてきた。

流石に荷物の量が多くなり、保存に使う魔力が回復速度を上回り、寮に戻つた時にはほぼ魔力切れ状態だった。

流石に家具などもあるので今度はミリイの部屋まで荷物を運び込んだ。

俺がミリイに言われた通りの配置に家具を置いていき、他の荷物を置き部屋を後にした。

その後俺の部屋も家具を置き荷物を片付け、ちょうど一息入れようと思つたところでミリイが俺の部屋へやつてきた。

「どうした？」

「夕食ができましたのでお迎えに上がりました

買い物時に夕食の話になつて、今日せコイ作ってくれるところになつていて。

俺が料理ならできると云ふたら、『数学以外にもできるものがあるんですね』などと皮肉を言われた。

「ちよつと段落したところだつたんだよ」

やつ言いながら俺は部屋を出てコイの部屋に行く。

「お粗末をまでした

「お粗末をまでした

ミコイの料理はかなり上手く、軽々と平らげることができた。

食べ終わった皿を片付けて俺は話しかかる。

「せうてえ、コイもこいつに通つてたのか？」

「はい、義務教育でしたので」

「じゃあ、友達もこいつに通つてたのか？」

俺の問いに對してコイは首を横に振る。

「いいえ、私は使用人養成のための特別クラスに通つておりましたので中等部卒業と同時に皆この学園を出ました」

俺はその話を聞いて疑問を持った。

「使用者で養成しなきやいけないもんなのか?」

「はい、仕える主人の身の回りの世話は当然のこととして身辺警護もこなせなければ使用者にはなれませんから」

「じゃあ、ミリィもこいで頑張ったんだな」

「まさか、またこの学園に戻つてくるとは思いませんでしたがね」

セツニヒミリィは微笑む。

そのあと、俺は自分の部屋に戻り残りの荷物を片付けてから眠りについた。

次の日の朝

カーテンの隙間からは朝日が差し込み、部屋をノックする音が部屋には響き渡る。

そんなことは気にもせず布団の中で丸くなる俺。

しばらくするとノックの音はしなくなり、諦めて帰つたかと思つたところで耳元で爆音が鳴り、俺は飛び起きる。

「おはようござります」

まるで何もなかつたかのようこつも道理に挨拶をする//コトヤ。

「ああ、おはよじやなくて、なんで部屋の中に入つて来てるのー。？」

「以前、ノックをしても反応がなければ部屋に入つて起//していと言されましたので」

「うん、言つたけどおはじやなくてどうやつて入つたんだよーー?」

やつこ//リイは納得がいつたような顔をする。

「やの」とでしたか、これです

そつ言つて//リイが見せてきたのは寮の鍵である、しかも俺の部屋番号がかいてある。

「あれ、俺も鍵持つてるぞ?」

そつ言つて保存していたこの部屋の鍵を出す。

「これは合鍵です、使用人だと言つたら寮母さんがくれました

俺のプライベート空間//の瞬間に崩れ去つた。

「そのカギをよこしなさい」

「申し訳ありませんが、できません」

「そのカギをよこしてくだれこ」

「断ります」

「お願いです、そのカギをくださー」

「ダメです」

俺はその日帰りの車の中でも鍵を渡すよつに頼んだが、ミコイは断固としてそれを拒んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9118w/>

異世界で過ごす日々

2011年10月9日19時56分発行